57X
27
60

風とわ本

宇治巻 五

[illegible]

慶應義塾圖書館藏

寛永二年の春より寛永三年の四月まで

そのころ藤つぼと申すは故左大臣殿の女なり
るんおりしけるまで今上主上と申させし時、今の
きさきまゐり給ひしかば、むつましうけられける
そのはせひへとくに独し給めれど、されなりしに
よゆりつしもすくてさしへ給ふ。明石ノ中宮にハ宮たち
もおはしまさで、おはすび給めるをさやうれしくも
すくなくて、藤つぼノ女宮ノ女三之宮一所ぞうちまゐりへりける。
藤つぼノ女宮けがれくらちおもしう人にとされてまゐりぬる
すくをおほけしくおぼゆりけりまゝ、これにやを
ぎまいらでも末のころもなぐさむべうりみて、
ことさんとうしづきこえて給ことなりかなしず

一やかし

御かたちもいとおかしくおはすれば、みかど（今上）もらう
たきものにおもひきこえさせ給へり。女一の宮を世に
たぐひなきものにかしづききこえさせ給に、おほ
かたの世のおぼえこそおよぶべうもあらね、うちうちの
ありさまはおさおさおとらず。ちゝおとゞ（藤つぼ）の御いき
ほひいかめしかりしなごり、いたくおとろへねば、
ことに心もとなきことなどなくて、さぶらふ
人々のなりすがたよりはじめ、たゆみなく時々に
つけつゝ、とゝのへこのみ、いまめかしくゆへ
ゆへしきさまにもてなし給へり。十四（女二）になり給年、
御もぎきせたてまつり給はんとて、春よりうちは
じめて、ことなくおぼしいそぎて、なにごともなべ
てならぬさまにとおぼしまうく。いにしへよりつたはる
たからものども、このおりにこそはとさぐる
いでつゝ、いみじくいとなみ給に、女御（ねうご）夏ごろ物のけ
にわづらひ給ひて、いとはかなくうせ給ひぬ。いふかひ
なくくちおしきことを、うち（今上）にもおぼしなげく。（ねうご）心ば
へなさけなさけしく、なつかしき所おはしつる御かた
なれば、殿上人どもも、こよなくさうざうしかるべき
わざかなとおしみきこゆ。おほかたさるまじききはの
女官（によくはん）などまでしのびきこえぬはなし。宮（女二）はまして若き
御心ちに、心ぼそくかなしくおぼしいりたるを、（今上）きこし

ありて心づからしく哀におぼしめさるれバ、此四十九
日ごろのまゝに、遊びてまかでさせ給へり。日ごろに
かゝる世語つくろひてまかでさせ給ふ。くろきれども
やつれておもしろき御ありさまをみ給ふに、かくなん
めでたき御ありさまの心ざし御もかよふめるをおぼしなど
のみ、世の中つくるも、今すこしおぼしやりけるにもあらず
ふ気色のまかりなへる筋ぞ、ころやすくはさりて
まつらせ給へど、まことにはれ給ふ方もそもう
ことなれませのなべきことどもなやうのなども
人あるにけるに大荒すりのことなどいふも
人心をいたはり給ふ世のおぼしなり

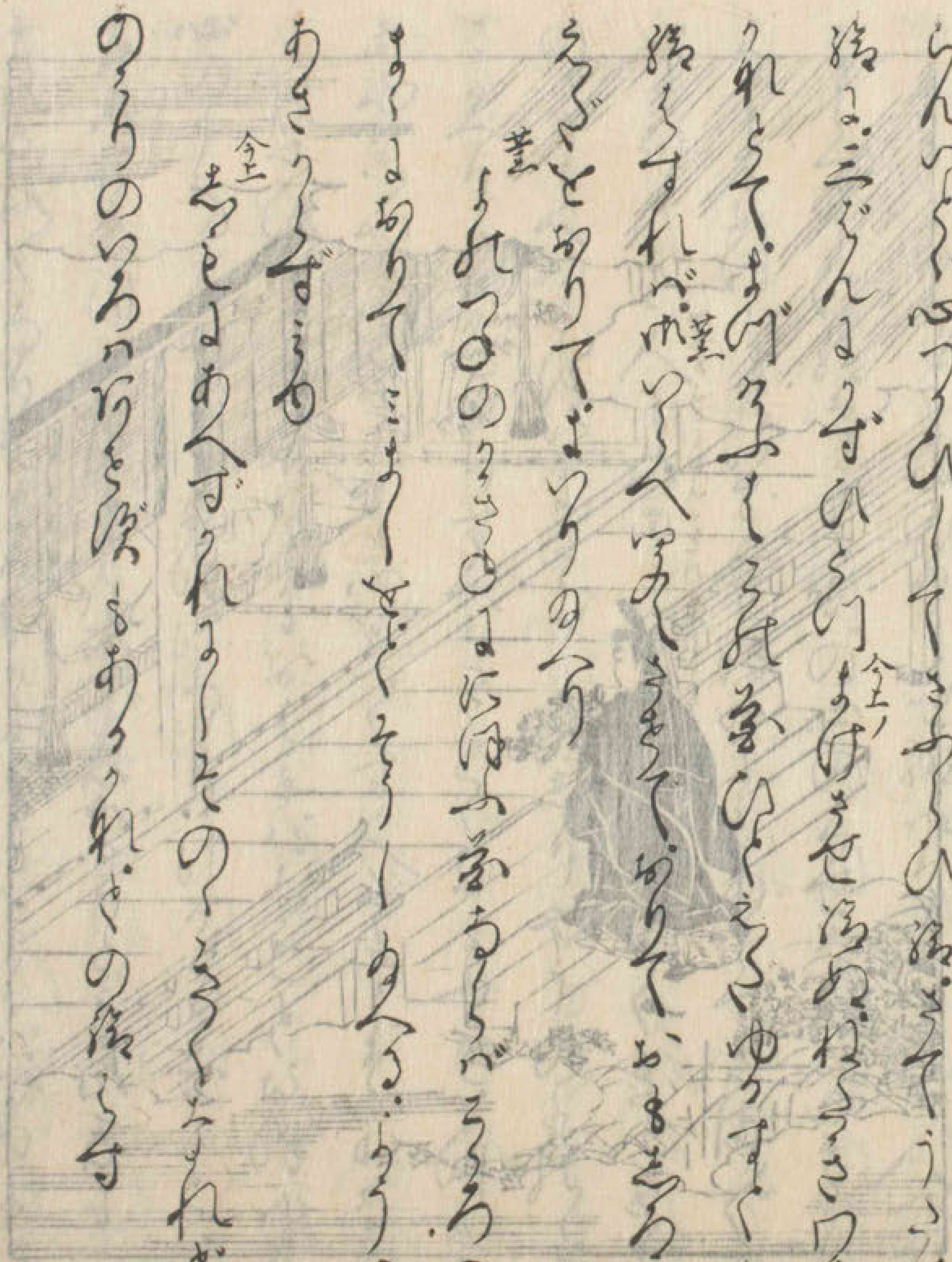
つまもあらずやんごとなきめ人々ともおぼえず。人
まそまめし給ふんも、女いとろおぐろしきさまにおぼ
りめべきこそかしおしかれまするひろ
あるやうにおぼしおつふもやすしざり。
おほかたの草らけろひとてさうなるなごりの
気色も哀なうち時雨するにもまづ二代の御
らくのて世のとおぼしえてし、世語にはのちに
なでもおぼとなるまれくしいさけあつらず
思ひ給ひぬくしたる世語がやうなる
れらぬどうつもあるうらん人のなてふやしき人
もあるく度あるざらん。朱雀院の御家と、六条院に

ゆづりきこえし給しおりのさぶらひどもも上お〳〵。おぼし
出るまじくしいづぞやおかずもおかれ。（女二ノ宮）さしてぞも
おりあまりにきこゆるもじをばかりしかど。
（薫）源中納言のひとよりことなりけりさ衛まで。かく
よろげどうちあることにてまつりあそ。それゆゑの御
覚しおもふ人ぞやむごとなきさ衛までいみじくなん
給ぬれ。さしもずすれこころよりはかるゝとくも出
きこそ。それづる人まうろめられ給ことかやあくま
しあはでおぼしつべくそこともかくもゆかしんむら
世のや。ちかごろめるましくおぼしよるれ。（女二と女三のとくまへ）やがてその
つかでのまゝなば（薫）中納言よりほかまようしかる

一回

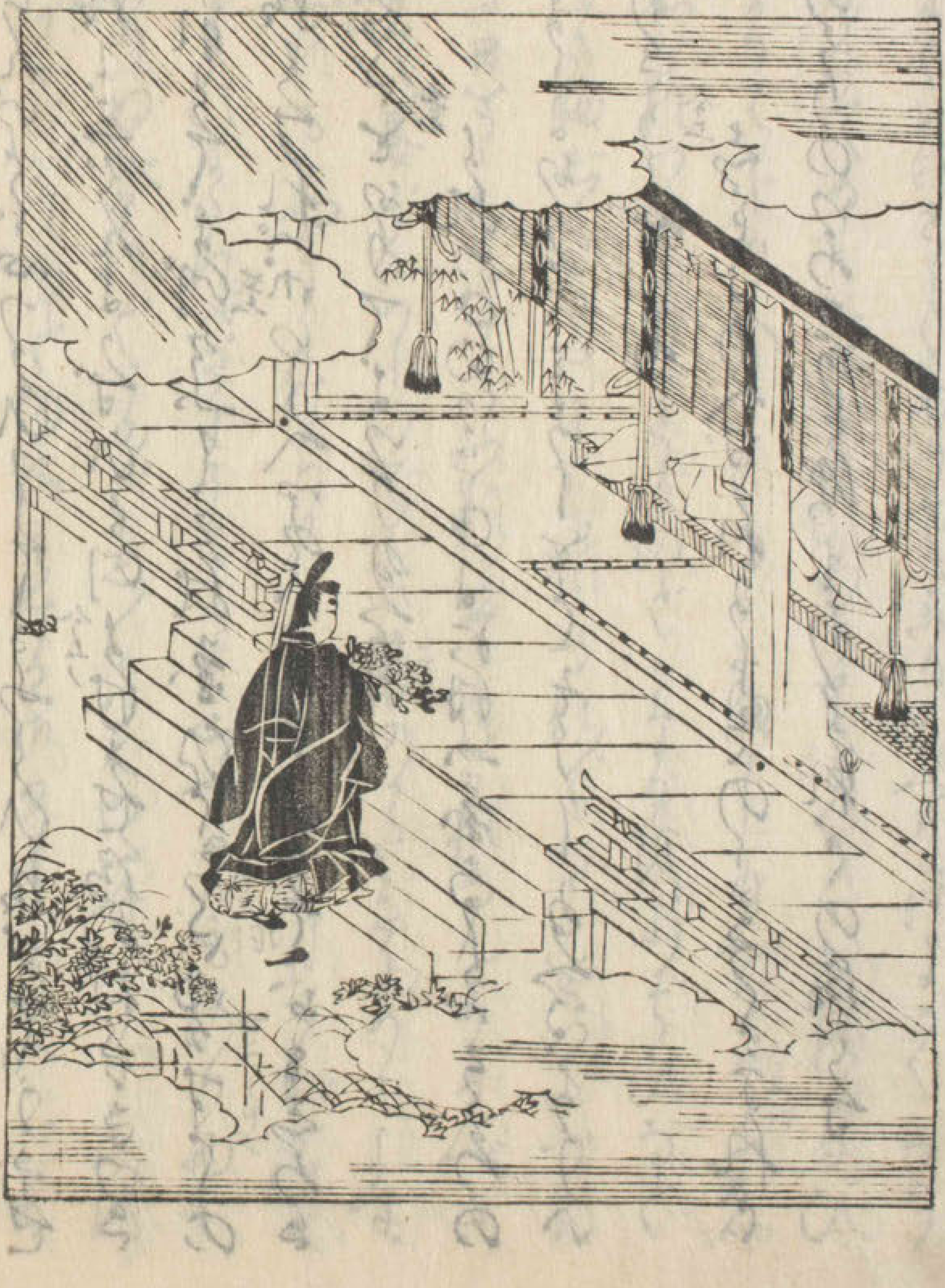
づき人あまたありけれどみちのれうきりてまさし
あらんさきにおなまじどもめぢ衛をくへあしじ也
まくよりかまふ人もかりうて。さてはくらしとちかづ
うちまずまじうりて。おめりせつねにはさやうの
ことあそてしもえあしうじ。さしぬきさまさるや
はのめしてまし給るぞ。おりくおぼしめぐり。
れ碁あそびうちせ給。（女三と）くれゆくまゝまむずかれおりしら
ほどは。空の色も夕ぐれしうは風かんじてん
（今上ノ兵子こ）（今上詞）めしてぶじつまば我ぶつまされくらくこちき給よ。
中づかさのここうんづけのここ。（薫）中納言みあかたくの
あそんさつらふとぞうす。（今上詞）中納言のあそんこちする

まとゐをなしてありて。〔上〕手まりのあそびげまりくさり
ゆみそのほかもあそびありて。とりどりに面白ひ
なかにも人はしらず藤しのぶの。〔上羽〕かくれあそび
なれつまのかよひのぞくさすがおもひのあまり
すさみ心ざきうちすていさゝかも心をかくして
は日をくらしくらしつれまてもこれなんよくうべき
とて碁ぞんかしいつでかれ碁のうちそめしより
いづれもおやまけがたくあそしむけなくし碁は
あらいまされば。さるまちそくせうすは。〔上羽〕あふさのりかえ
かりめぐられどうらぐもくいえのをまで〔女ニ〕のり捨て
〔上下〕うきまさく立まの碁をうちすて。それかしまさいくぞうれ



〔上〕らんかの心づくしひしてきのふけふ碁をさしてうちくらせ
碁は三ぢんはすゝめのよはひあけぼのゝねぶりさめぬさきのうさ
それよりぞよく碁をしらぬ月日をおくるゆふぐれの
碁をうちつれべく〔上〕人のこゝろをきそひてかつておもふさま
なすとありてまつりのかへり
〔上〕うれはのうきのはたは月あらがひこゝろの
すきはありてこまをしとそとしめぐるうちうい
あさくすゞ
〔今上〕さつもはあへずれはしろのこゝろをなれど
のかりのいろかはりを路はおもふれさぞの碁をうつ

つれ〳〵はかりくはのめうらせ給ひけれしを。人づて
あはずうけ給はりずとて。例の心の色あれば。いそがし
くてもあはしず。いでや順いまもわすれず。さ候ぐる
心をおしらん人々ぞ。のれ〳〵ぐもなとも。くれぐれと
けさうし人ぬるほうまさうるまひまゐりやうの。ものも世
まゐりぞん心ちすべきてとくおなかとも。何をも
おやかやまともとさうるは心をつくす人ぞまさりておもはれ
とはなひあはずるに。給ひしはおもちをもばれとも。おほゆる
心のうちぞおもひけるけりけるかうかくらせ給ひ
右大臣の家にて六の君はとものこ
をいまにふくらちをあやうしきこしうしがつねまは



えいあびもそでをおぼしつゝせいらひのほかなる
とりそへめぐりあひねぐらおぼされそれども
白 笑がてのみちをいふげにまことあしたがかりくる
かげつ。おゝしらす風まよひて給ひとりゝえずり 六義八句ノ
それがうぞれの花ざりの心すかすかいありともがな
べきまでにこゝろもまよふやうもなきかなしみ
まゝましうおもひさぶらむとてもおもくしき
さはまらぬらんといふ人わたくしめぐりこゝち
すべしらずおぼしあまりまよひ。やでうきてめぐく
けむの世の末まで。全 こゝぞびむこもめ給めり
世をまよひて。人のさかりすぶんもあいなし

昭ノ すゝびそのかゝしげきののひて。中宮まもまゐめ
るをうしや給こゝろびかさなりそれば 中宮 さうしめ
まづらひていかにかくつかくせいひころ 中宮羽白二の給こ
さくてそのへのひめる花おやまふくるのをぞれこゝに
給もんもおほかけなるやうなるらん。こゝちいは心
うちわのしきそぞろくもわかれ。うへの花世を
末なるかりけりとのこおぼしの給めるを。さて人々と
ひとつるにつまりぬれば。まことに心をけけんよりも
るけるあれぞれぶるかれ タ おもひの。いとゞめぐらう
あはれなるこうしやこゝにすくまでなくて
見れし給ふずやはあはれてこれはせいらひそこそ

そしゆゑとも、かれこそおまへさまもさふらふりんを
ちなくおんちなく、例ならずとつけておんえ
しうらえ、させ給ふに、けがれところにもおとより
まそくされてとくさ、ご覧ぜぬとさるればおゐかゞら
まゐるそてくい、おもまづ、さき御よりも実にさき給りん
さがいとこともしげるおこりに、こなとこあ
られて、こころやすくもとひのへるなりさ御の衣を
うらんとぞ給、お御ぐるしくおぼすよ抱うさこたれど
げにさられおとぐに、おもかり恋んぜられもてんもおい
まらんちなく、やうやくおぼしよくりにくるみなら
べし、あぐいなすれころなれば、かれ按察の大納言の

ようえいのれうとぞもちをおぼしにて、すけ紅の葉を
つけてもののなひけるつて、いづれをもゆるしうも
御されならぶされどそれをしいらそらぬ、女二の宮
もれふかくそてめれば、ゆかしかるまじとよろはぞうら
つま給りん、さもこそしいぞぞとおぼしめしける
はかしこまるあんとつげさてゆるき人ぐくもあるゆゑ
あまりよくすかばかならんものへかくしうしみすめげ
あるやうにおぼしめうして、さらべきさうらひして
そしこぞことうこして給ありくもわかるに、げにしこまさ
やうになどそくいおんぞれほかるおぼしうてこめ
さるりとつてまもここに、しげからぬ氣色ともこれど、

こゝろのうちには、かなしみありて、すでに絶えてしひとしれ
ぬさしきれ、歎すべき世なく覚ゆれば、かへりて
くちをしかりし絶けりひとしれ、なぐさめてかはさ
すぎゆくまでは、すぎぬけんと、覚ゆるく、恋しくひ
若さは、あはしきことなくつきて、それ有様なりすまして
おぼしたる人も、心もとなかるべし、常なりけん
かのけふりはいけて、ぶさ、今一たびみえてまつ
まれなきものから、のこおぼしてや、むかしをかたる
ぞ、夜は、いかしりたまはゞ、いかにぞくろなる左
のおぼしめしは、いとさむさ、うらみて、八月ばかりなと
きこしめしてゞ、二萬箇のさいのかれなくは、こそ

ぬかまされけん、さは、いかで、には、むなしきあり、また夜か
めればかなさ人、いかへりうきこと出え、物ぞ
とは、ちかくゑしつゝ世ぞかし。あぶこそすかれころと
きこゆるしき、それもしげりなくもひなかしめて
ちくて、かくまいけるかとも、ま、あくれて
かゝこ楽世のことも絶えつゝ、浅ましまかくらり絶らん
ほど、いかがは、やすき心ちはすべからん。さて人のなす
らひなどのやうまいざしもあざりなく、ながらは
らずとも、いかまやすげなきこと、おぼけらん、かな浅
なぞうき身なれば、つゐには山ずみの身なるべき
なあらなむ、おぼすまも、やがておとこしあるまし

よろづ山がけのまちかさんものどけくありらし
返くもこ家の絵をうしろへこひてくさの
まどされにけるもかげなき流とぞしうもけ
くもおひをられ給ふ非常のいとたどけなく抱くら
ありさま道るのことおもぶくともおぼしの絵しかど
ころのそでのづしやかなる前はつまるくもかけし
けられ・中納言の哀の今はけすしるべき世なく
ながけさけなり給めれど・もし世におもせましかば
又かやうにおぼすとハ首りやせましそれをいと
めづらしうぞさはあしじくおひけりのぞとき道
うげ道にまでさるれんとせおぼしてくら

ほとんどてんらし給しぞうしろまにずさら道
まぞおぼせましい家せ家ハかまをまりうか
家けれうろきぞてあすさしあさされがどすく我せば
いかまうまちさあられけさく給らんとてそけ
うしうなすさおぼをぶるすにはなひるすさ抱かう・
かうさしさえもしくそてもかんと悪び返し
けさくもつれぬ道までゐて給家につてよりち
哀まるかしうおきなかくてひちぞうけくば
世のことなすおぼさとぞのとぞこれめさてう給
さうてこれさ有ざらなり例なくしぬ道にあるや
あしうち給ことも行りまうこちこうもくる

かゝるとはしらる○とつねなりも地まつると
なとなくふしてのことおもしすら紙まてさやうなる
人のありさまなとよくもえしる句○からぬあ
つきはなるれはよくおもひすゝめりさて句はしけう
らすなおやしてあはしとゝあらことくもありて
ましいふみしきる人くましさやう侍なやむなれ
なとのおもふありもあれとふしさへうしものて
さりけなくのこまかしなし句とさしすきゝて昔
人もなるれとふしかよも見え句をすゝえ侍り
なりぬれとこゝ目なとほのかにそつへいさゝか句にあらは
へきらんとまはおもしろ○とかひそん句心もうし

なとおもひく句はされてことしの句にかぬるとも心にいされ
さんぞ心うくあはし句志のひえうとくおもあしゝす
世中なんてありうらゝ句をの句とならさまの句
くぬことゝいひうしてかうゆかしくうんうくけう句
まし後さえくなりしなうなれとふちちまつり
ねせてしもなるとまうことをは心ましく句ゝすこつゝ
しつれはあまれなとしもなりいうなは句まさう
いうまも句さんとこゝろさまゝかしきまさかりうう
それは時ぐれ我身とて、まりなましく句河ゝ
高ていりなうかし学もし句やもしさつしてきつゝさ
のさむしさやうれなへきゝ中納言殿もおもうくあしき

わざれてこそ縁に悪ごとなどかなはず家なれば
哀さはあはすとも、うちあらしさへにまかせ
はなかりけるひるんし、女がたもほどもまさりける
まれし法つかまて、ゆかひるもそこしまけちる
縁ちるかば、月いつもさもありし縁なるが、まいる程なく
世し縁なん、まて哀なるべきされなるにも、なほもかなる
つきしもおかいるしや、我心にかなふしにゆづりけるに
けんぞうの大人はこころをとあそし、しのち、おほける乃
世後もさひかるれて、すこしそうしろくの心も
よごりそめしかば、ぐみれかとせのことさ後か
後にはさるがうごとずは人のこころゆかされて

あらんこそはらじめかりせしはいかなるべしく
ふかくうつ、さいかまして、すこしもおそれさせ
それて、うちとけのくえんるしるこも、こえんとけ
さきのあるまじきのことも、けれども、まいりて大人もところ
おもおもはまて、みて、すこしてさすかうつくしも
えさしさるつまびらかのの人、家ちかく、あまに、おなじ
男ぞといひおりて、後いふしめぬかなかもむけ給
しぼりてくらしあしからりかべ、まけこそこころを
さてとらへんそて、うちさきをし、わざぞうしうと 匂ひ中と
あるうちはめてしうもれ、ぞうぞしくおそ、河つき
さびらしさるし、ほど、心いけるもやさえしう

かりけるこゝろのうちこそ。まことにやさしき文まなひ
ともこれほどのはかなき後世給へば。げにさらん事を
もすこしつくづくと給ひしや。とせうする。いそや今はその
あはれをしるべしとげてもの給ひていざあらうしおほく
あるべきことはすこしうつりやするかひとこそ女房
このこゝろもおもひすてこれ申しけるくどくかなしき
こともわりなめぐさるかりしあるをさうして学問し給
ひつまでにはおぼりつくるまじきことろうちあ
らひまへ人いひとこそわるくもどりしくことゆかおほ
へし。これ人をせうしうこそまうりありそしけ
こそよはこのどのれむすめを給はんと思ひしせざ

うちもだかれしくもおもはず。これ中宮をえましくかなしく
あはれゆかし心の前国まで入て。まさるも。さでかれ
ゆかりとせうまでせらるれども紀ぞうしなしうく
いは中までもかなしがりあくせうそうしおくりし物語。
今のよるら給はりのそゝまも。せんまいらん人へとおほせ
らくおほ人てしばらく何かせらずることにおほせ。
さられあはひきゝそうし後世。さるべ人のあるのこ
あん。さらあはしうまふしこふにまで。これ世まれ
のかりめべきとの給ふしまれ後。おほまかなりても
やうあるまつけてはつゝまでつくしともやまは給へ
んあさ。つくづくと人やかしあまぬひかりねし給

あはれくハあるまじき人のいとまもあれこそあめれ
きしかたもさしる人のうへいはむかしのことさへ
とふひめづらし後おもはけのあすさへまちつゝそこひ
なれけるくつゝひなまし後人ぞの中まほどの
つゆしくくずおほさるゝもわかぬべきなれば後て
さま後こゝろとともなきくにもやうるれ
宗祇ノ説を是とし
さなりとみ恋ぶらの人ざまぞとうあはしこさいの
人ぞもとらせまとゝひつておとらへて心ばみすけ
なるすまおすみずとふぞむかりいくおもせたな
どつとも間なれど今やうし世後ぞむさもあれん
とさい人さとこゝろさし心ともなほぞしまなき

ずらのとりはるくて思ひてんとおふみそつゝい
みなまさらぞさきもわろく我ところずしもちけ
てもおろかるべきうちもやがてまどろまず
おりのへるおしなま昔のありさまう昔の名く
おもろくいわれ中まおさずれのすられげま
てまずやよくる後に後にてよきめとゆるこゝちし給
おる家まさらてようゑかゝ世をもちすしつが
こゝろざしさるありしうしもおけあるべし
ひょうそめまちふつておりしの人ぞしさま恋
ひくるも後もさびひとりのえぞ給けれ人めして
是何
かの後まのらんまゝくしうらね車さし

出させまくの給へばかや（句）ハ（内者ノ詞）日よりうちうちするなん
おりまするつよべれ車めそくり給まさく
中。まぎられ（書泊）たる（云）のれなゞ（中）のあやし給ちをう。よふ
ちひるてん。けまいうちるまいうべさ日あるれば日
みけぬさるかとのゝそてれさうぞくし給。いで給
ありは。おりて家の中よもじつとのへるれさ御も
ましきまえんぎち色めきてまてあり給るるゝ
どおやまうぶうちこゝろよお御めしうちつゝけ
まそおうぶらせしさぶろ色こそれどもよおすゝ
べくもあらずとのげりしおりしうぞこゝし給け。
給がれとひさきをもまよう日いつうしたる

一十四

（書）
けさのまれ色よやめぞんまく家のさしめよ
うつ筆とあつくなれおなぞひとりぐちそておりり
てま給へりとえ行へしをバさすきそぞいぞ給ぬ。
明にちあうりまくまをありふちらきうて恋ありしさ（云家俊ノ）
ま女とちの恋とけふすくあさいしのへくえんうしうう（書仏）
しのまぐるがうちてきこ花でくらんしそうねく
しうるべきれ給あそでさまゞきなまりりとや家
がしくめて中門のあさ方うりらせめくへぞ
さうりしどもしられとありて給べし。女房のけりひ
あやしう給りつくやしをげ。おりそてきりのまぎれね
いぬよくあゆといりのへく大将家（句）の世ひさうぎ

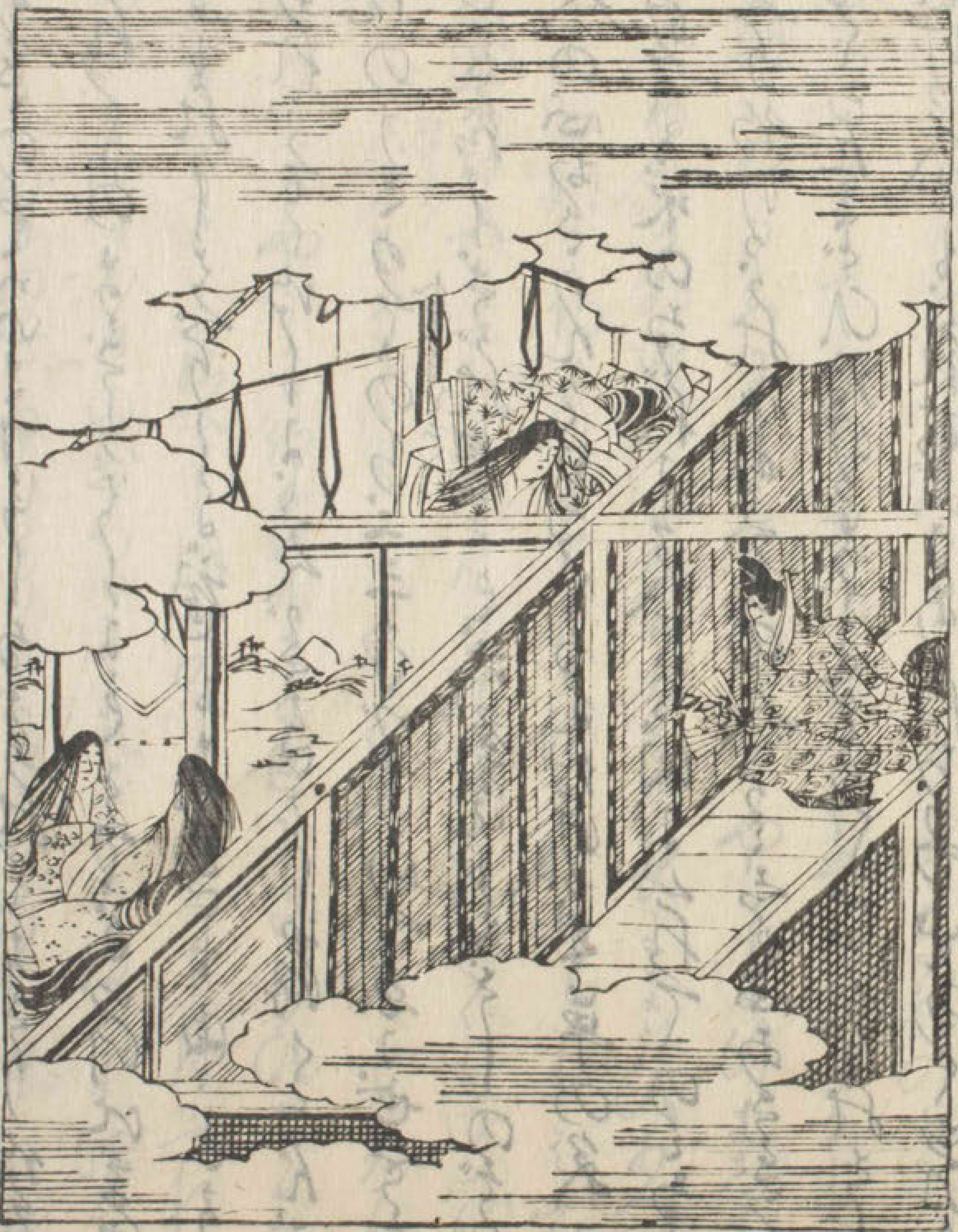
一十五

ちらへりのきゆるまやしらる。うちまうちまあり
めへる語り衛のいとさ海によるまひられば。ちば
かば海しうおらすし心とおまりおさめ給ふ
まくよくられなじおひうけつさへごあど。寛
あへりば。からつさぐはすもおらず。らさ給よ行そよ
めさそて流されてゝ○さし出るゝすうさ海もいにしめやすし
（詞）これはさふへいゆうさせ給ほどに人色しさ心ち
すれどおろ代らうミすれまへはさしもうさせ給
つるられのしさるあん。さもしくもえさうもぬと
の人がきらばいかい行べうらんとことせ（地）こさる
おもてあぎやうのられぞうし（詞）おめびと

あばいのさつてうんまとよりるらやすさゞらろへ
それもまことあゞれ心なすれがりれ人さしもべさるまち
御らずらそて参るげるそうりておいそれ衛の
人ぞ村おしこまくまあぞその寄（詞）
けふひちやうさるまおくさうなば抱し給らめ
人がしるる候らふくもあやまるまてあるしおさめ
見ればいまは（中）こぶつくさてて給ひともやうし
うさそつまうしつるすてつうすらこさて
おまるれ給ふうりるやまし（詞）うおぼさるまん海も
いるれがなかじどひ寄てのへがたらうじしくも
れいしんさうて給もず。（詞）○よりもさあり給へ所

ゆくされ心ぐるしく哀にもおもひしられはべりて。
この後やま世中のあるべきやうなどをせうしう
やうのものかはしましやうにぞへちぎる事
詩声などもつゞきはのくりともおぼしざりし
こゝおやさしさまでうたゝれしのこおぼゆる。
いとめでたくかしうまだうたゝずがれもひさかげて。
うしむかひきてしも詩もくちあやこのへらん
くちゆかしう覚て詩もなば世中は独なにめひ
ともえあるまじきかざりやあらんぞなこゝろもこれ
詩人ぐさくさくをさるいは候はゞずとも。
ちかきはかまよしとありちうげしく男なまらく

かやむき後はみな成なくてもかしこいべきことは世と。
さびしきおもひのまへし後心うくもてさしくもおこ
なましくもやさき独おもひをもとぐくはやもと
かずちひ給ひてまいてあいみすたれつるき位など
つひて大事はすめぐしてのうれへなつけて。
あげさなふくらもられやいますうつきこれふるき
しまさらんなどいひつおりこ後くるそうは
おふぎまうちをさてこねのへるがやうくおぼえ
まてゆくもちうく文のあくひおしうこゆれど
やさしさしいれて
しらへてもうらべりまりきし給のちぶうか



まさし鈴虫の音じよくさしびてしもとまで
あらぬる露をおしさで ゆるまへりけるかしおか
しくこゆかしきさまあるべくろうく氣色ありければ
みしぬまゝれぬる葉のそよぎるさくなる
つゆにあはぞでまされるはつれつらいらくこそれ
びてよくもつゞけずいひくあつげなりひけるかな
ほどにお娘いとよくはめへるゝれとよふかき鹵
けぞゐるしさ

あきの色ハいますこしあざやかにまさり給ふ覧
つれづれのまぎらはしにもとてさぶらひし宇治
にまれまれしるべりしより後もまぎらはしとおぼしける
あれさてしかしまへかへさにしおぼくなんこ
院のうちのそのちハ二三年ばかりのすゑつ世をそむき
ひき給ひしさが院のもとに六条院もさしのぞく（大覚寺と云）
人の心おきめなるくなんおぼしけるも草の名に
つけても水のながれにそへても涙にくれてのこらん
ことあはれけるにれいおほかりの人ハなきも心あさきん
るべくなんまでひおぼしけるぞなくつづひきれもう
れけん人ともあれおもひくらしにおぼれちうつきのくもれて

なるくすまねおぼし給めりしに、けるさ給の女房
ども、まして心おきめんなくなん覚しけりまでに御
おぼしぬらさるにまなせいくに山をやしなひけりまなり。
すずろなるね中人になりなまし、家にまかひおへる
こそおほく侍られ、さてかの浪にまぎれあへしらて。
志草なよそて後なん、これ夜のおとくどもつくり
すこしつちのかちもなずもくくもれしあへだじ、あらる
みちふるやうに給ふめのさる世なさぐひなさ
なうしるく給へし程のとしもさし月かれば
ちひさ御すありの出るにまそのとき給ふまで、げに
まぎりあり、りのかがなるらうとなんしさ給しこうくそ

かくしきせなりとも、我身のうへのかなしさは
まづいかなりける報ひにて、かくまでもさまぬ
にや侍りけん。花ごゝろちりやすき姿にてうまれつくべきさる
なくさひのみへしうまれは、おなじくは世の中の
なりひなれど、うきよのなかにはまじりて侍る
すやしそれさへなん心うく侍るぞ。おないの人さへさ候は
心ありけなり。むかしの人とてかしこくも。おもひ定め
さらん人ざま。我人のせめ人るはなしこさ候らん
うはずとらまでもあるまじき候。まいて我も
わが心ばそく思ひまぎれ給まつけてし、いとゞ
つれづれもなげきまさりしくなむなりて

給心なれば、今すこしまよはされて、猶まよひなくして給
もずみしひのまゝにすぎへるけしきひとつかたはいと
数とおもひなしし給。世のうきよりはなずびとも
いひしをもさやうにおもひなすかつるまでくま
なくて。さしふるをすこし侍しを、いまなるれいうぞ
きびしかる候まてもさこそ候はじくなるなかなるを。
さすがに心にもかれはざめれば、年のあまりにそうう
やましく侍れば我大日なりの程には我ちかき
寺の僧のこゝろもこゝろへてさ候はゞおぼし侍る候
見びてかくさせ給そんやとかくさせぞやとなんなむ
侍りけるとの事へば。おもうまじくおもほすまじくもいふぞ

かくろやすきものとぞよふにゆたかなのほどなり
ましき山からすは御れバおもひつゝあまん有日まん
さうでも御敬家のれつき日にハ紙おぎりはさのべき
さもごもこれいひをさ御あさかうしこハ九さうさ
ゐるおぼしゆづりてよ時ぐさのかつはつけてむ。
からまじひのくしきめもおいちちまづとうしおき
きぬまゐし御りあがやとあん心御るれ。まるいぐ
おぼしとさうつゝん。ども〳〵もきごめさせ御つんさ
ありくひそこそであん。おゑへりうんやうは
の御ぢまよりし。ちまぶともうとうしずらけ御い
らんのきそ清いゐふまでへ御しあおまんとぞあ

ぶらふらぐきとをうつし御経佛あぐこのうん
もらやうじのべきいちゐりうやうろうつぞてまでと
つけてやをしてあらわちぞやとおもむけある
ぐしきゐれバ蓋肉じおりまづきくしちり九ちまぶ
も心のぐろまをおぼしうせちぐ。ぞし。へ家て浩目さし
わづりそ。人ぐ乗りおつまりちぐすれバ蓋仏佛のまりあが
わもしくおりがかちんまらう。いぞ御うんうて。
細いづくまでもきすれとまほちしひ御しれたけし
さちりさ心ちき御てちん。いま文ゟやりまさうこ
らんうそくらちめ。蓋仏家白のうぐろきおりまいこそ
らんと。ぞひのひぬべきされ心ちりもけづらいそ。

きりしひのべにありける右京のすけめして、よべきまうで
させ給ぬく気色りてまいりけるを、おほしく海さ
ればありけれ、くちおしきおもちにやまいり
べきことの人べに、まいまて左つまひあんと
ゆきばさしが夕つるもとて出かぬおん代これ
れけるひおりさ海をさら給ひびとまおぼえて若の
人の御心をさそをまして、うべへて、もひくまちあり
けんくゆか心のこまかりゆけども、うおやへやさ
るしぬ心あらんとおもひうへし給、そのまかり
いまいさうじまそいくをとあひさのをし給
りおりくし給ちくある代つけく

御どきそて、物しどけあきれころかを、なくみれ
気色をいとあやうくゆくしとおぼえて、いく世と
もわしじをきこそまうらん行いかひおろき海まて
このへ世中をもひすて給さんをもうろ身なり
てもき海ろけてしめんべきまもわしぬそこ代世
まそいふひあるさ心ちすべきき心まどひよういとく
つゝやうらんとのみ、がかくしげけるくいとおし
そてよろづでもひけちつくおもへまても物もひ
あきさ海をつくり給、大の御いをは六条院の東
のおくどをとござきいりひて、ぐざりあくようづを
とのへて、まち寄給よ十六日の月やうくさし

あかりまで心まよふなれば、ひとしも此心はいつより
こゝまでハなんぞやすらずおぼして、あなか
しこくべ。これゆめつくこうちらりいそでのすて二条
院はなんおりしますなるとひと、おぼすべきも又
れども心やましなれどもこゝろひすさんも人々は人
なべなれば、此子の仏ゆねししてふさてしのかう
おぼぞうのほどはやどるはが宿はまつらひ
すぎてこしめ。えんは家ハ中々今なるども。こし
心ざしよおぼえそ、うちよおりしけるほど、此かた
きこえのすりけるに、此色やいうじおりけん、おやさ
あるれはおぼされなれば、きのびてはうりのすへりけり

なりらりけるる有海をすてていけへき
こちもきずいとおしなれば、よろびけるちぶりけ
引ぐさめるそて、おもろともよ月をるすめておもす
ほどなりなりおん女ハ日ごろもよろげよおもふにく
おぼれどいらで、気色はいでさらぬとぞよろびける
はかで色しつつ、うれおかさ海し給ときれば
こゝるさーもとどめぬ海はおぼしとよまもてな
よておなすなる海はと義なるお中ねのきり給
へるほどとそさぬて、さずなれもいとおしなれば
お給なんとて、いまいとくく海はりさん、ひとつり月か
給そよ心そゝるれバいとくなりしと守えてとさきのて。

かやうのこゝろはこれのみならずあらん数へつく
まし結れうまろでとことくまどもくも見て心ど
ふぢまらしのうゑめべき心ちのすれば心うき施く
人の心すなほならねば我ながらしもあらずさるは偽ど
よりさるはなく義なる身どもまで世中をさひ
かくめぐる故はさもおもはせざりし一旦とさぬるところ
ろしさきてあだ山寺に年へしかどさるでうみと
なくつれづれはすゞうハあるなづらふととく心より
まことて世淡すさまれとも心さしてさりしなましかば
と大と記ある
つゞきあさましきれてとぐ有後さひし持ハ世ま文
さまりてる時なべくも見えしず悲しうなりし

とのさぐひあしくよめひしを含るがくて
いまでもあなづりふれバひとれせひさりしほどより
しひらみずまもあるやうなる学徒をあなづるべき
よくしも心をとどめうかゞうハすくげなき白心
ぞんまでなしなるまやうくみなとうすくさ
てあらへつる後これありていの身のうへふて
へんなるくだざりとお陀ゆかりげさなりなりひとへ
すし世はなくなる読ミし人ぞよりそゞさらあ
これハ時ともなどなれども古へに後ゝらるひらく
ふそて教結つゝさるゝふつてり記これらる
ふぶり心ばへくいゞじふるゞ心あるゞ常ひやら

こゝろなく心うくも有れどおのづからなぐさむへど
みづからなぐさめんとさすがにすて山の
月のさすゝのぼりて夜ふかくなりゆけば
くれ竹松風の吹くる袖ともおもしろし山
おろしはおもひくらぶれどいとのどかなるに
しめやかすまされすゝみゐたれどこのひはさも
わびしげなるの葉のそよとかはとうちてあはれ
廿
山里のまつのけはひもてなしがら見ゆる
はあさの風いみじう

ふしぐはわざれにけるにやあらんかゝ人ぞかし
たゞし光行は勘もいはせ給はで月ころはいまこそかへりまれ
みさおきましうられきれかしもれなかりける
ゆかしくはべれ。○はいかなるたよりせ給ふらん。あれ見
かし。や大弐三位ゆかしうこそ思ひ出らるゝことも侍れと
こそりうちられぬうちあはれさへいでや此れ事
まさりともかくてぞかはりたまひけるりとて給はり
さのみ心ぞしらずうらみそめつる中には
給へるため物ぞかしは思ひあへるも源氏くまなく
らく今はいかならむもいはせざらむされど
しもこそめでたく思ほさるらんへはいと嬉しくて猶ひとつ

一葉六

根深くんとてやあらん。いでや中納言殿のさぶらひ
衰ふるはいふかひなき事なれど。その人の心
あるをそ。人のはすくきなれやしかりけるを
まうでの思ひあへり。家はいと心ぐるしう思ほしけるに
色めかしきされ心まさりて。めでたき所をまさり
世をはんと心げさうして。えさらずかたきための
れけるひいんかなし。おほかたのかくるときかの
有様も。はかなしかりし人のほどにしてや
あへりまたまさはわしくて。よくるかはるめでたきは
ゆかしかへるけはいいかなる物にて。むかしやかで
心ざへもさやかなるをあらはなく。まれはかりかる

なかやあはれ、うあはれてそあはれなれなど
物はかしこきやうなれば、ひとたびあはれとぞもやれ心
ずしもかくなるべうしも物はさればなり。秋もぞ
されどものはしかはすや。様もなくあけぬ。くるり様
てもさのへにかくもえりくり様りず。さて物に見え
ごまりておきさてぞれ文りさ様。れ人しきけさうしれ
あしぬかありと。おきまへなる人につきしろかざさ、
のれることで心ぐるしけれ。天下ろりおまるなされ
心あるらもものづしけるをさるくことありなん
りしるどもずよしもおもずさなれつらまへり
かくばあれば。やすくすうちりかくとくもなりて。

もとべてれのうけるのは、さぞありけるれるなる
しるくそでてくあはせ給ふれ。候どの物はつる
なるを。つれのへぞてうらいりたりて心ぐるしそれば、
いそざりうら様わくうれのれりうち。いとめでたく
家ありていり様へつる。おしふるもうへそあれば、
すくしおきさおかりておもとすくまうちあるとあへる
後のまあひるが。けさまもこるまおしけさぬ
さるもてそしぬへば。おいろく同がまれて。むかく
しら海まりあ人のほどもつしく物はそそ。うらう
がしぬへるかうこれりるまりんざしなど。候いとあり
ぐるげるり。家もあ海りしるなるま。う海やりなる

こしかたは行もえぬひ出給ふぬかなかつてまや。
（白河）なまぐくのこゝろやましげなるゝれ気色なくん。おつさ給
のよくゝの給しうだいはいしうとすぐし給ぞ
給むなるもる候らわぐしうしぬいこゝろしき
わざられ。さ候ぐまさすうまも。おやしうち
かしるさ心ちのこゝそすれ。さはおりたすゑうしは
まるのべてしそてはかうしめ。たゞうしあらん僧もされ。
あまりし僧都とぞよびはさやうのすべうりける
なをや、うるる。まめやしその給へじ。中々うるゝすまも
よしよきは心づきなくおぼしなへど。じげはいはん
きこしざんもこそあれば。むしもおやまうし

ひとかくぬ宿なをそやうのあらは侍しかどその
わりいはとよくとそれ地との給へど。（白河）いとよく
しそさゝやゝあれはうちけしひてあそうしうあい
わりつゞきるゝもこれはあしぶ人はあしうし
とかひるゞし地候文とくゆりしきるゝの心はしれ
のさはそはひのまへるは心ざしのとゞりなるしぬなあり
しされども（中々）の候はしうけちぬもあるさゞまや
後の世までとちうひきれぬ給ことぞのつきなるも
そくはつけでもげにこれ世はいとうじうくめる。命
まつまもわしきれ心はそしめべきれば後のちぎり
やらぬるぬこともありてなよなよそて。れる事りすゝまる

まるともされまれめべくなれとていかゞうらみんずべし
あれば、え先びあへぬや、名にはあふさき結ぬ日ばを
いかでかくさひなりとこそしなしど、よろづに扨まひ
まぎらかしつる夜、さ海ぐなり扨まひあけ読る
こらし扨ほかれば、されこもえかそくさかれぬよや
猶れそめていかにとみえ、つめよひ結ゑめねせいかと
もづりくまびしともひていつくそむきかのへぞ、
(白)なおそひさむけ結つゞ(詞)さしゆかまくに哀なるかれ
わりさ海をとこつる夜、花へぞそふかれ心よりそもれし
あひなれおさらずは衣の程ぞよ扨ばしかりよる
よそし、うかれ袖とそ消そのゞひかすへば、(中詞)秋のまの心

がたりその結にかけてそしらされ給ぬかし
とぞすゝし浮くもとめぬ、(白詞)げにあはれなるや、おもふされ物
いひや、されどもまことには心よき海のなきれども、いと
うろやすし、いらじとこそらりしてこそ切とも、
いとまなるべきにけざそでむけるせのよくらりを
まり結もぬとそらうしとふ純りしかりあうれぬらし
かれ女よるよしても心めぐらしのへ女せ心さそも
とめ宿結なかりし、まし(初詞)まふやうしなる世もあるかな
人よまさりけり心ぞらしの程ぞと、世はすらべき、
つかしあんあらさとやすくといけべきとしかとも
あられば、命のことをなぞの結徒まらしるよ侍り

のぞつるれ使ハいとうきひすぶるまされバすゝしつゝ
かるべきさくも忘てげざやるま花されごかもてま
あわりおまれかゝめづらしげあうむまよろげさ
うけまれさる代さるめりと人ハどうついゆのほどるま
いそぶうぶら給つらんとこゝろもやすしゝずんあり
けんかし家もあるずちまいいとむべなるまはおしめど
さしぐらはる代いとおもしさ代すゝしのよういも
あれかしとる夜かるいうしいうれど宮またひ
あられバ女房もそれ文どかいれさせのふおるべ
くはへぶそてあるきさ夜はまてるしもてむさ荒
てぬきあけかへるるまて母の家のれてちあかりく

あれバはすこしこゝろやすくそあさきのかぞ
をむじげきまてもうきこゝろのけぶやさらしらふ
ゐくらうつゝさまざまのしのぶれどうかるやまし
げまてあん
そこれ人しも後れそまそろあさ家のいゐる
ときけう名残らうしんあてやりまおうしうかさ
あへうぶしくげまさしげるそもけづらうしやまとかへ心
やすくて心ぶらしいあらんとおもふ世とおもひのほか
まもありうれどへの後へどまるゝかゝうとなくて
さありべき抱まなもひあるしひふうて人の中こそ
うやうるうこゝのうしめしされバともそうひとく様

ちくハあれども人じられしのとかくしつあまたるか
べきれいよりありゝ家ちゝとさゝ世の中にありしも
すぢなるは世人もさえてられぞいくらりもくえ
雑もんこともまださきおつあどきれバ人もはれける世
にておしなどしおもひまてしぬるべしげむかり
まおくもくりしつぎさすへ人なて心ぐるしくさうる
ぞかなす事あばしかるぞぞいをいおかりけり
とハ字中らなじの心まもおもりまちまてしり
あそいおほうるまちしるなゝるべきかたげりしさ
あありうすぢといるれバおさりまず人の世ふ
らんぞ常物紙あどとなるまもひとみれうんあど

まそもおやうらてむひしいげるぞありたるか
あじをれげさかりなりとりげまふるしてぞおぼとも
あひもとれ絡けれ哀いつるよりも哀まうちとかける
ふさ陵はまぞあそるまかてじげよあれまうつざあるか
そびとあしるれあどのおひてふしあかれぞごとあれ
めしま世あるてうるべきさんめしてさなくさうこてう
ぞるせ絡ちぞしつまくぞのしなえてしかへ人どいと
くかうちのとおぼしされバじぐうしさうげざれど
らげさ字絡はられぬれバタつるきん發へ字る
まとのお風すりしくお月るとのもおうくらるれ
あろをうはあしるるすこしあへるれ心あられども

やさしくえんありけるは。娘もろくしき人のかうらう
のうちはうつまきのびやうきくのまぞ相模なり
けるびんびくしのるく声まで。山のかげのこゑしくて
御目るまでさうまし娘をひぐしぬるこゑ
うつくしき秋のもれかれ。ざらひはかなくかけぬるは
ぞ浩なりれさまでの恋のまとくなるまくは。
あまもつりすらづりはあるも。我ながらしかたらこゑ
かれとくおまふくさてやしきてうじめうり娘浩
お娘まさ浩し有さ夜あるぞ。御まひ出るもうと
まうさまで。お娘ゆ。それあやまちてとくもいか
かんとすらん。いざしいのちうぢうさぞうたれば。

やうるらんつつそまもや。さうろく娘なりんと
すまんるどむふまはおもしろ。どうあるもおもしろ
又いとつきかうりもあるる娘とならで。夜どろあまれ
ぬまくはおまひあし浩。その日はさいの文やや
まげまおもしますとて。それもくまつり仕
どひまへれどいはくかまるれかぜ入りおり
ありかれがくあるともおもしますとて。
おさずいひるまりそで浩まなり。中納言の君さそひ
まうしめてびとみれ車までぞまって浩まけり。
そまひのござしさいかるらんさまをつくさんと
あげすべくあれど。かぶりあらんし。それまさも心

かゞしけれど、さしもさきくこのみえしは、げにめでたし
御前はまいらうべきさへもおぼえず、物のたへはきんは
ころことはさらにまれし給へるれば、なまりし御
あしずのそでしうもうで給て人(業平　六帖ノ上)のいうへはこなし
さ給はおしこそおぼへらずあまやとくまろ
ふるはあつひの夕べ夜おどろかひとこれずちな殿
ねこしこそおぼしけるにひすうしすぐ給は
(句ノ)おつしあしたる、きん歌のこれふのひさしびんがし
はよりておぼしまいれられ座(ざい)や何、れいのれさ
らそゞろうもしけるにさしこそ又ちいさきぞ
かなくは、うみそくのきしどもでいて殿かし

きさせのそで、まちおまいるせの女房めでたし(地)
ことうさぞくこそまうされ、おどろいて、いりのそで花(夕)(河)
いさう文(古今)めうとく、あかましてそぐのかしこくて
女へどかたは(白ん)あざれてどこにも出給へど、小宮のれ(雲井ノ兄弟ヘ)
ちかうの后清わ女、藤宰相ちかづりまなし給
(句)かうしてまかへられさ殿、かくろうひある心
らず女房(タノ子良)の頭中将、れさゝぐさしげて、れるは
(業)まいかつぎくのれかしけ、二たび三たびまいり給
源中納言のいふすゝめのまへるは、(白八)(六帖上業ノ)みすみしばらく
まうけづかしさうりど、ふさがりてずさひ
こいひしを、見て出るあり、(業)されどしらぬやう

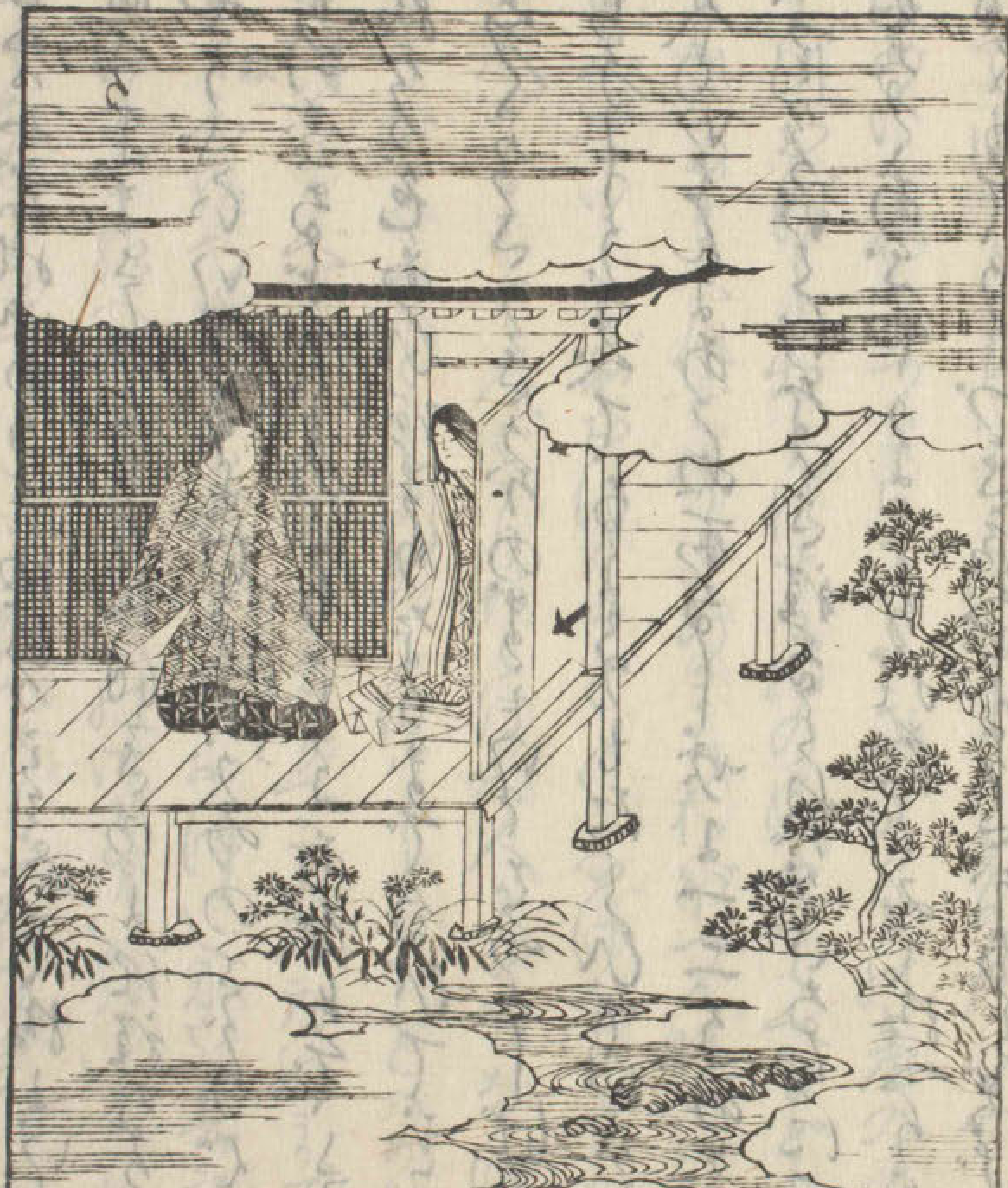
そのときまゐりあひつるの座敷に出かてけれどもの
人々まてそろへし給ひしかの夜は人々どもいとおほく
より四位六人は女のさうぞくにほそながそへて
五位十人はうへかされのうしこみきれもられは
ちめあるべし六位四人はおやのほそながぞかし被か
ぞなりけるかうさうおかことはおんずゝりしたれども袖
の色しき被るとぞいひさうらはれけんのてりける
めづらしきことなりの中にまことにめでたかりしことさうまで
いみじうあるんまけるげまうくあざりつかうまつりやうる
かことはかうらひあれは袖口なとまてもよつひきそふ
まゐらんされどくらしうつたえぞうらへふてさうりけるとや

薫 中納言殿のおほん中まおほしおきやりたまふ
ぬや、らうたきまさればこそまじらひもしたまへり
て折るげさて、びん殿のたどりおりしまいる殿の御
むこうちなしを給ふしまいおちさるれひとり
出さやと中門のもとまでつぶやきけるとぞきこえ
給て、おほしとるおほしなが、歳の頃げにねかへれ
ま、たれまでうしづれなん、ばかりちらげまさひぬる
侍ておりかすぬらんかしとうちやましきなめ
まうし、薫ハかりてふし給て、ぶしさるけなるわざ
なるべくしげなるさ海しうたるや乃いぞぬて
ものもれぬたまうひるれどこれら迷次あまりかく

げてかくめでたきゆかりづきあるどいとめやす
くもてなし給ひつつあるに、みやのれありさ海
とりやすく思ひたてまつり給ふ、げに我こそもよし
とたよふ女子どもをもてさましぶこの家をこそ
まうりてうちにびかえまのうをげらましとおほす、
されもく家にならむと心ざしのあらむ人もそめい
る、源中納言にこそとらぐはいひあらしふなり
こそげ、気くれくちおしくはあらぬるあれさらい
いとたのもしげずふるあいらう抽をなすどんとどう
こせらはうちのかくしれあり、とまくとはおかし
さんまかくのこまれうくおほしは、いらずすべうる

ひおもてしきことはいかにとも、いふべきはかり
なし。いかにぞ放光はいとよくはつまらん時なう
是かしとむかしとものに答へはさすがにえまて
られるまじことなるかなし。例のねぢあかちな
はつれぐさるれば、おぢちれ意とてひとよからすこし
おもひまし給へかゞつかまつりまかりして、その給ひ
あるしのかつ河をもさんと人のとがむべき
所もぬはくるしげはいかぎおこ給をだゞる
おもふべからぬ事
（あぜち）うちわすし世はゆかしなきせさ河をこゝる
をめぐんをそかしくれとりそおかし　何事べ

主　かくらずうへはこゆれどもとさ川乃志され
からひくゆか物ははふかしとの給ひんすてがは（地）
そのましげるさどこれうへのあるにいかどころ
やましうおほゆらむかしうまどをかし　何とて
此ことは此そらどこそうへりでかこれとおもつずかれ
まてはあるさんとよえんかるひとまゐはあら
でいかどかしかつくるりゆくよるくれねざ
然るはこの世後の世までなれんとやられて衣なる
あざかひまざらしてかいぞ給（地）ひとまたうしき
るすれとずとつくされどさ後のるまめし給みな
しげすやあからむかるけそうくるぞかしうへのおほと



こゝ道頂ずらりそめれきかれごともまうひろえ
給へる人のげらくてゞふらてまうけやとの
こゝろきこゆるやおもずらにせどうじき給へら
十三 家のけれうさにえんとゞつ歯りあまらて
さふら婦もおそれなることかどくまつけ給へた
かるべし

白ん
むかしハ女君（六君）かれ〳〵あつかひさこそて給はいとくれ
心さしまさりたり。たゞさきに北殿ある人なん。
やうぶいとこきよげなり。ふみのまどのたより
らつかなども。ものゝよりことおほかめでことこ
給ふ色あひの（いの）かりやすきまで匂ひて。そのつく
しくさらさらかのまことにいとらうしげなら
らうしうすべてありのまゝもたらひて。かうちらに
人といはんはあらぬ所なし。姫は一二ばかりあまりに給
へつるかをけなすき給ふらぬ。かうたるらに乃ける
所あるくおぶやうまさりけれ。恋しみし給へりけるなら
るくまてうしづき給へるまうけさかなるしたげなおや

まことは心もよどりし給ふべかりたり。たゞやりつら
にあはざるやうつまらうしてさるすなかみ宮のれつるハ（中）
まづおほし出られたる。猶の給ふいうへなども。もち
らひ多くまへれど。すりあまりたがつゆくハあらず深
きべていとこ所おほくかゞくしげなりつうさま
かへども三十人ばかりがうは六人がうかなる添なく
さうぞくなれども。例のうはりしきことはめでたき（好）
おぼえさうへうめれバ。ひさしさゞへこゝろえぬまでこれ
（殺）らぞ志給へる。三条（でう）殿（玄のゝりうく）がらのおほいとの殿をも家う
まりけせ給へ添りもこれ添るすとバ。いとゞに
おもひますてさこそ給へるも。（白）家の北の方しうさ殿

かくありかくてのち二条院にまうでころやまくも
ゆくりなくハかくろなるゝ見るゝれバなおぼえ
まくまひられ給あなどもしえ出みかゝ〇バやがておちず
られこのまちまゝしげみしやうまたりしまして
らられバ又えひさしき程でもありつ給ハ涙なども して
給ども又なるおりくあるとぞかへらんずるとハ
おぼしいでざりしほとけうりてはいとうれしもや
ハあいなるべきさげまんあらむ人ハいすゞむぬ方
と志りてぞまじらふべきこせよあらざりけるをとが
へもくも山僧ハ寺いでかんかどうつともおぼし
めくやしくするしけ道ハたがひので思ひてつくり

あらんにげまそむくさ海をはあらぬとも志げしなを
もなかきめバや。まくげまもてるしなどもそば
つろうくきておはらめあなどひとはまをひあまり
てらげりしけ道ど中納言殿まれふとなれ給ふ一日のれ
事ハあなり乃つろへあらしまくりしつさいぬ給ま
きおとげれころの名給あるらまりしかバいるハいとお
しくなおひ給へるゝまもしげころくなりくしあ
らあんくぬべくハそぞかりもきこうし給へりみ
ちめくはかりまひきもつくろハまめぶろちてら
きこ給へるしもいとねらしげるり。故宮の御忌日
ま例のことぶをりてたうとくせさ給へりけると。

よはひびさこし給へば、さすがの、おどろくしうハ
あらねどげにも思ひ給へらめつらし。御ハこれより
さてまつるれ過をぶつまうちとけずつてましげり
ながしてなぐさむをつけ給をぬと、けげから
とさへの給へるがめづらしくうれしさ。ける
らさめさをも思ぬべし。京のいゆめうしくこれと
うち給へ御かどもて。おぼしをこころもげる
ころぐるしくをしたら御運ば。いと哀れて。あらし
やかなるもなきこれ見とうちもをらず御かへしく
見ね給へられ。過はうけ給はりぬ。一日ハひじつしづち
いろさ海まてごとさらるまもの。びんしも。ふさ

給ふるやう侍るころなひ給てなん。あながちにとの給
りせいつるこそ。ずちしあさくあるりまづつろやうあと。
すらめしう思給へられ。よろ何ハいまのさうなるひて
るん。侍るをしこと。すくなうまゝ思ひろことさし乃
こはく思ひさまており。まてゆの日比文つくるこそわ
それめつらく人志漢でもふ心しうひたれど。おいな
くんづるひいらうせられて。なかなくかたする侍ずども
とりとぐる侍りしろへのへるハ。あまりたど給ふくし
さくまでなりまゝ。丁子ぞめれおふぞきの。もてなら
しぬへるうつりがあるとさへ。ふと心へるこるすくで。
おりしたるを。安然もおやしかりしよれつとを

とおもひいで給ふおりくるすさましもおしつゝみ
まめやかに衰ろへ給へるたゞ人にあらず抽しね
とみにまつりてもおもひしらずとおもひたまひ
よやま給ふんなりけりもいとけなきさかりまし
おほせねばうしめしさ人のけんぞくともふかくしぶる
にはおのづともいとゞこゝろすくなくおぼしれすゞや
つねはへずておほかたもいとおしく抽あひしぬさ
御よ心ひのふかんなれどおもひ給て侍ふはこゝろのう
ちにいま(甚と)まかり給てもやのこすまま丁ろへて(我を)
をこしひさいりてこゝめしをへりわざ(甚相)とめしとは
侍らざりしかど道いやすらびゆるさせ給へりし

よろこびはかぎりなきにあはれにかなしく侍しかど
わすれを給とうけ給はりしかばおもひあはしくやまとて
なからはかなし侍なるさはもし此の御法の志るしにも
やうくわすられ侍りなんやくべてすゑしうけらせば
侍なるなるみのうちよめづらしく侍らざりけるとの給
ま(中将)ゐらせしくるしういぞん玄の薬もなうさん
なそれど(相)はうれしくさて侍し心のうちを御のた
ぶつしをかゝ道ながら通し侍るが心のあるうちを
だものでかかと口おしさすぬといふと川へまうしけるは
なこの給ふがうしくしさでみなしぐかのゆ
ささこゆれば心(甚ら)もとなくていと(相)(とと)遠くも侍るに

やうにこそえさせうけ給はらまほしき世の御ありさまも
侍られとの給へば、げん(けん)はおぼしてすこしうち
ゑみたり給けりひとこそ給ふもふとむねうち
ふされど、さりげなくいとどあはれなるさまに侍し(白)かば
それはこそ給はらんとおほかたはおさうたりしかとおぼ
しくのみいひしもうとめのまいらなくなりさめもしうく
ならに心ざしくとるこし給へつゝおかしきに妙(げん)心(ん)への
けうらめしきことはうちのかたにかくいひつゝさてつくえなる
べきことすまじくもあらねばたゞ世やはうきなんとやうな
おもひをてことばくあらまほしきこともつゝ心ほ
わかるさ海のやうにたまへとたがひしていとらんで

ろけなさての給ぞれいしをごころひとつにまかせ
てはえ給はりまつまじきなればなり給はむ
さて心うつろひうつしきを世給ていれはやしにま
忘るぶひくなんよく給べきはちらずはもうてまたが
ひあきてんぶうくもあるをおぼしものとんずと
おしう給りあんさぶまはのおぼうはみちの給のれ
とうりもの人をだにうちそてつうまつらんまあるすれ
ならうけば給はんうしろやすて人のめぬてこの
ねごいは家(白)もえあるまてせのへうだすずといひあるくだり
おりけるおとうれくやしさとおもひておりなく御
まもずれやとぞうりへさ海かしこきちまのあるどもの見

しつゝやうくらうあらけりのでおはあらま。
いさうらさくおぼして。さうげろうちをちうや〳〵しく
のゝ給ふ文のおもてくおもへらんかどくまるまづらを
そへ。うら給ぬかくしかさなちが。つとくちおしうれば
さても。うつらうにおかしうつべきうゝ。うとしげう
待しらちの草もすこし打ちらり世給らんしと。
こあそうるこさらしかへば。おぼし入さして。ご此月も
るもねべうめれば。つゝてもちれ。ほどもおもとして八忠給ね。
さいづ忘のびてよそのゝらめ。たすあう世の中かし
なども、くしうてその給ふ忌の。いらびうらう
なげあるうたすてう。みからもむへしおいでつるしま。

えつゝみあへで。うりぬ給へるけしうられものゝの。
すゞれの忘るらりや。そしてえびて此袖をひとへ以。
女ぶりや。おある心うとおもふよみなまがとうはいはまん。
抽きはそれで。いとゞひるさいうら給へば。それまつるさて
いとうれかりよなうつらはうちまりうてそひかし
給へり。あつるぞや。患びてはかるべうおぼせうしらむ
けるが。うれしきかひがみくいとかれしさんとうかぶ
うとくしくおぼすべきさみもおしぬと心う此御
気色やとうしこなへば。ゆく人あへきこうちもとず。
おりずまふくちひなりぬらぞ。せめて忘づめて。
おもひのかなりけられ心のかどくるま。人のおもふしん

ことよおさましとあやめてなほこさぬべきこゝちしはべる
すかしはそとりられがひておしけれどこれはとが
わかざかりのことゝふかざかりれこいめんくゝいかし
へともおぼしいでようしずぎよし大人のゆ跡
しをありし地をいとこらよたかりおぼされはべる
しそ中ゝうしてあれずすべさぐちくめざ成しまき
心はあしとはやまくおぼえていとのどやかに
まてなりかへれどばゞろくやしとてひつかう
みれうちのくるしさまでありけさ成とつぶくと
ゆおいつけ給てゆるすへきくさまもあくれは
世になるくわうじともよのつるり中ゝなけ

ころ志らざらむ人よりもちづしうんづきるくて
なゐ給ぬるとこはるぞなほなりくしとはいひるが
ちゝひとしらずちけよこゝろぐるしき地から
ようりゝふくろぶりしげるりそらひなどのこし
わびよらもこよなくわびまさり給へらなるを
とるらにこゝろゝよろ人まさるしてうくやさ
うらず和をおもふことゝやしなよもまさげなね
いたうれくらちうさまし彼女ぞうかゝらぞゐき
おもゑずぶ給たるおしこれくりきこうなれば
まうたこはりなするすがとも海のならぬかく
うとりゝずまてしかりし給はなしらひるれずゝ跡

やうこそハあらめとおもひなからいかつけ給ふ。
むかしのすかたまてやさしかりしさまにかはりて、地いとおし
さや。おもふこ君をいとしへとくゆらんのあはれさ
なとても、いとさびしからぬならめれと、むかしの
ゆかしきおほえて、かれよりいふれはおほかたなどさらひの
すゑにもなくてなしとさて給はざりける。ゆうのまへ
らんこ海のまもえたるんまゐびてはげらかろう。さひ
あはさ他から、人めれあいあるさ浅むへとよろけり
心返してはそでぬれまかりひとむひつ返とあつま
らうあらはなろとみをとがむるのとまやあらむやき。
りつらし、紀も。女のなれ〳〵あれはとかしぶうし。

なやましげにてわたりたまひけるに、とかくことわり給ふ
いとあはれとおもひ給へりつゝ、うしろはしるし
また浅くはこころぐるしう覚えてもやらぬ名残
後いかおこがましれこころやとおへとおほさけなき
らむとはある浅いとかいなかるべし。まつくたらさ地
のかたみ給ふれはなくて、なかなかうちたかうこころ
とつひて、のち心やもくしもえあらさらんもの
からやわたくしのびはりけんかともさころづくしま
女のさぐおぼしさぶれんことよあるど。さうし色
あふまうれど、い海のうちのも恋しさぞうちなるな
かる。さらにえてハえあるまじくおほかた給ふ。海て

慧心 中ノ多
あやうくなりにけるかな・むかしのりはすこしかぞ
ねぎそて・あそてまらうつりけるとひなどはいふなり
ものなれらともおぼしめぞ・おもそひうらんらしそ・
さらはこそくもおぼえはるりまゐらう・うらまいひと
わうつま後しけまおうぢひかのめり必・きまやもりて
まそててまし るゞふへども・まくてよ京はゆりしかのひ
てんや・さらとそ志のびてもいとびんなりもむ・
いかさ後まりてうふ人めみゞうしとそでぞぶこころの
ゆくべきさるとどころもあくがれておぼめくしらへら
まづいそおかしきあしくまはれふくとあり例のうちべきく・
いとけざやかなりふそて又ので

慧
いろづくはわけつゝみちたる露しげきこむかし
なげゆく秋の空ぞ暮れぬれ是の心ろうきにはべるとぞ
まぼろしぬつらきそれこそなんさこそさせんくさるくと
中心
あはれ人々なりとも人の例をおぼえてとぶむ
文句
さるとぞいとくるしけまうけたまはりぬいとおや
ましうてえさえさせずとぞらうきあへることぞ・
慧心
おほかたとむくなく忘られとさうくしくて・
おもしろつれけりひの意しうおぼし出て・
またてし世中とも志りながらはまいやさぞうらあ
さまのしうわりるしとは志給へらつまみちらひる
おもはかぬくたなどはおもて・いとらうくしく

こゝろしげなる気色もそひてさすがなるくるしう
おひうらへなどしていぶし給へるかどのれん
らへなどとおもひ出るもねたうきかるしうも
お悔ぐまぬ心あらんやまでまびしくおかげ也あやまり
をいましへはいつとおほくまさらで思ひいでら侍
何かはこれ求られなそ給はばわか身をたのもしく（も）は
あはれべきまゝそはあめれさてもあらわれてこそ
やすきさ悔はえなにともおのびつゝまうさじひ
まも人なき心のとまりますまうはあらしめおぼしたじ
このまれこつとおぼゆらぞかしうらぬところなき
や。さばかり心かろげなることしげらしまんへどかうく

いふ物のこゝろうかりつるとよなきき人のわれ
しきいはうらひなきさまでもいとそうつらし
そきまでいなすららそうつれいよろ川までまぬひめぐ
らされ給ろうふは来わすらせ給ぬるにくいの
みとこそくまうしろこのこゝろいらせてむまう
ちつがでいとうしやましうおぼゆ家はいとろ
またらはろろいおちがけんさんうらめしうおぼすれとく
みつはかつら給へ侍るなり何かはうつろへぞ
たうき悔なもみしこそまうじ堂なとものひた
川なをふのまへべはおもふ人まうとまし心そひ
給へまとろうとゝろうのなは世中いと家をうおもひなる

逢ても後のうきみたちわらとただ忘てせぬ
程いあるはまかせておいらちあらんと忘てくちとら
うそげまつこゝろうつくしきこ恋はまもてあそしておる
まへ逢がいくく哀まうれしくおぼされてぼづろの
どこからみずぞきちあるくの給ふだけりしとまこて
かくうきあちまゐるにかれくちぢ給ふあてしめおびのび
きゆくれる程あるどいとあられまぶきうく泪人を
ちらくてもこらぬかぶらそれがめづらしくさへおぼし
そらうちとけぬ所まるそひぬてよろ川のそう
んやもくおうしうおぼさるてまでにおそろある
ぬつともとうきを寺の給ひちぶきをとまくまゝ川

けてそらくのとりとあきかぶそのやあくむじゝあれ
がらたちつる人のけれそしれもらむられてとゞころ
あられなられんぞんとはさわうらつれどもうく泪ちる
ぶ後まては哀ともあつをのでえそるるとおふまず。
これはゆくされのとれめそいゞやともあるがらも。
もらうみてとまりるうさてもあさましうこゝゆめ
うゆあそいらみくらし程よむらしめ人まうとく
てものしるすたすぶらくら給し心ぞへいげよあるが
くらげ逢ど程うちらくべくあらざらそうてな
どうよく心づらひをき泪まもひきしくとぞ給
そんとかいよ地おそろしうらんべくおぼしあるへぞ

ことまでハかなはねど色めかさるゝかたハよこて
まつりごと海まで有し跡へ海をこえていとゞか
ぎり有し河内れとおぼしきまされ人の流る
里かれぬと思ひたふまじきかへらぬれつる乃かる
のかはかれるさきもめぐるみもなりまつ白ひ
なるをその中ちれ人なしおもひあれバおやしとぞ
めいで跡でいかるらしとぞうとうしきぞ跡ま
ことれかくまでなるれぬとおもわれハいそん
うこなくわかなくてかてくらしとおぼいるぞ
されバよるゝずさるゝハあらなん事をめぐま
はぶかじとおもひまつるとぞつゝとれこゝろ

きかぶさらばまつハひとへの流れなどもぬきこゝろ
跡てげに道ぞおやしうこころよりかまだかへし
とをけるをそろもてぞはおうらわりてもいのしじと
よろげはきてよくの跡ひつでるまふかうしてか
ぞぎてきじとう跡あさきおもひさきゆかえ海しとるう袖
とかゞ道てうさきまなぞじかやうまうちそむしくきこえて
ことまこそあれ又けれてろなる跡ばかれかしじやね
色ゆるおもひのおまうかなゝれんかれとすぞ色で
まれぶべくもおしず思とくおしげに思し跡へども
きくもいくへ跡をぬさんでそねてさくて
又人まなれがるそでのうつりがを我身に立て

うらみ侘つゝれ。女はあさましうのぬのひつじくるゝ
きこしめしかくるまをとゞめつけとて
みえるれめる中の衣とられて浮かなるは
てやうけたる道なんぞてうちるる気色へうなる路の
うぐさやきなう衣るかる浪ろまも。わかれはずるうしとい
とぶこころやましくて。まれをかへくとぞ浮しれ
ぞ色めしれ花ってろなるやまくとおはみじきあ
やまちおりともひくするまいえぞうしとあんちつまじ
くらうちけまことろぐるしき涙すの志路へれぞえ
をうらみをそてぬ峯の路ひきしつ。川へうしく人
きこえし給ふるの日をこえ海のどうるお月とのごと

みおうみてれてうづれつゆるとまこえるとよあり す
れあつるひるどを。さげりかくやくだるりて海まじ
るしなれしきあやとうちゝきのふるかうつしよ
いよのつねまうちるれかるこゝちしてゝ人ぶれもが
さも。おも人どみるうらうちまじつもなまどしてゝいそぢ
うはえまりうろ。忘れてるまいかなまうれいろどもそ
るでしこれかろなずがかそねてうちまずれ路へつ
けさ海の岸まぶとものそう深うしくてゝとくさつさ
までさうるゝ人のれよそれはずまそれまむひもら
がれどけとそりてもおぼしずおうつしう花うし
きもこうるぞしのぞろうるうぬまこぢなどつらあ

まうし、あるはうつくしくみえ給へるしく人なすこて
かうやうさの御はいろハいよくしろうあらでおく
はおうしげなり。うの御はうは里がなどみいち志る
うらぬおかしうざまおいぶやうつならうたきところ
あどのお成人はおほくまさりておぼさるまく
はいこれをもうらるかはおしぬ人のけぢかく
いひかひて、ことにかれつてそのづらしきけるひ
ともさらにこれまんハいとでかたじけもおもりんかるる
ぞ志らおすひよりぬべきことなうとかいとくま
なきれ心あるしひまおぼしあし御進バつねれん
どもけてあうさ御またうめとたまどやめつとら

うきころしこらひつあるどやうぬものとおぼさるげ
あくてえうまへど、ちるものをあしくふぐいとすくよ
くまことずくなまでなさ成くしさなどぞ、かぶくと
あるけ道ど猶まそりまぜあるどしてもあるとは
やしる成いとうくのこハあらじうしと、うらぶ御
ま、うとびくふハやそうしじおぼさるることをらなま（比丘尼）
うし、くれひとのくしきをこころえあらん女のおかれ（白人）（芸子）
とれあひぬべきとおもどてくハことのかうまはそうし
もるだん、いともきおりひなれバ、くるてまあぶうあひ
かうすんうしと、あひや御ぞうまびしくいうしあふ
あくねさうらくらう、ある成いとやまをかしうざつまくされぞ。

それはもえ見ぞ給はん。六条院よりは。御文をぞ二た
び三たびまいれ給ふ。ひゞのかどはなれもうれしと思
集るらんとつぶやくおい人どもしおり。中納言の君
は。家のうちこもりおはすうをきくもしきもらやまし
くおぼゆれど。わりなしや。わがこゝろからおこがまし
ふうあしきぞうらしうしろやすくと思ひそめてし
あらのことどもくさもよそふべしやと思ひてぞう思
えしてさはいへども。えおぼしめてざめりしと
うれしくもあり人ゞぞれけりひるどのおまつりしき
かどみなへでとたありしば。なやり給て。母宮の御
くまおいり給てよろこぼきまうけの物どもやさふ

一五三

らふづふべきこそあるんとやは給へど。御乃ゆくしむ母
のほうじれ給ふまゝ。志ろき物どもあるどやあしらん
そめしかあるどは今はわざとも志るしぬをいそぎ給ひ
しそをはせめとの給へば。たまはりてとくしきなふ
よき給ふぞさふらふりんまゐらせてとくみえて
ぞ我るどまとかせ給て。女のさうぞくどもあまる
くぶらまきよせるかそおかゞども。志ろきかひね
ゑあまどもでおうまいらせてたゞあるかさぬあや
るゞさうぐし給。らづからぬれは過うとおぼしき
よは。まづれ過うまゐるる。くれるぬれうちめなんべて
るしぬまゝ志ろきおやどもおかゞはのまうさくさね給へる

まよひ海のくるしみはいはむかたなき有さまあらん。
これひとりあるをひとむまれびくにへて
むまれびくちぎりことなるさびもと多く
ひとすぢよしみやはすみたる人の恵とておとな
しとおもふ人のむつまじかる人はつかまへて
かへぬうき海のみぞつきしきはつきぐしまもてう
くしてあんとの縁でれ迷ふのは忘れびやかるれど、
そこまでつくことをとならはれらんとはせぬとさへ
ぐもなやうなすれてそむしひとつのことまで
めるれるもれば冷しれとみえしるとひろしる
さまよおもねばいかにたまきをおもひつづくもで、

人ごとはちちしなどもしれば、そのくさしぬひたる
どをうさ人ごのおもへちりつうまかるなどいふ。
ちりまでてはつくるひとつへなしもけりへどものぶ
ろうあへどみちらつつすぐさどもるど、しろきあらせ
るどまでげちえんなすらぬぞ中にめやすらはるた
迷ひはるまでるともうし深くつづき字ゆる人の
あらん。文はそろかるらぬれんざしのかどまでよろづ
といふでとおぼしとさてされど、こまかなるうらく
のるまではいかではおぼしおもむ、かぶりもなく
人はのこりつづきて迷てあるはせ縁へ迷ば、世中忠
うちあかれさびしきこと、いかなるねとをもり縁

かぬことゝかりけるか。えんまそゞろさむしく花のつゆを
もてあそびて世はをくすべき物とおぼしたるかど
ありかゞおもかゝぞひとのためなき道ばかりのつゝおかり給
しまつけつゝあやかなるへしまでもあはれかひ
あらせ給ひそおかしくめづらかなるすぢあれば
いぞやなどそしらかしけるにこそゆかしけめれとなど
をあらためられべきものゝぞからあそびやかなるらぬにもあり
ありうちすぢすゝめるとも志てすこ女君ハいとたちうしう。
中々なるさま御ものもゆかしかれるとも。人志ぬ道すハおかしく
車なるさまにしもおしぬまゝしてこれはつ人ろあせらひ
ひきたるゝ有様の花やかさまかハ家のうちめ人乃

見えずかなしとも人けるさまにおぼしみだるゝに
ともそそひてあるけうしきと。中納言の君ハいとよく
しもらきてねんごろともあはれなるまじ
うるさくしらぬべきころもひのさめもこの
づらとはるけ道ど。あるまかハことくしくもてなしてかの御
るらんも。中々おぼしなく見えとがむる人やあらん
と。おぼえてなりくらゐ御様ぞ又御のめやすき御様の
ものぞをるとせさをのそ。ほこうちきをもせおやの
道う給ちせるとし給ふ。此君しきぞ。宮のもな
き御ありて給ひす。御様ことはうしづまりてられてなく
なるまでころをごりもし世をなげきまして

おてなかんなる海をこゝよるけしきなど故郷のは山ぢをこ
とみそめ給しよりぞさびしき有様をあはれにおぼしけるを
こゝろはうちとけ心ひかれずしうおぼされておのへての
世にもおなじひめぐりしふかきるさけなるをもてるらひ
給よろしからずとおもひの人あくりしやとみうけぞてる沈
いそうしろやもちくおとなしき人までやさしるらん
かのうちも思ひつゞかぞ心ほかにまでもるしられば哀れ
文なとどもりしよりいこの海やうすまでさらすれば悲
びあまりなるにしみをつくしてこれ給すなど嫌悲は
とよびしさるうそひなきつ方とおぼしけるげ
ひとへにまぢらぬ人なすらぞ心あるもぐるおもしとちそ

なかさしくかれさんをやもそうへき読むうしかりさね
ことなりたのもしく人はあるらひさてば年のさしよるる
あしりあるし心を申ふ人めはしかるべしまさすがお
なきもるまもあらぬ流るみぞへなりさ海のあん
れをおもらぬまはあらぬぞさるもとてこゝろうけしげ
かなあへおもふかれもうとつゝましくいかにもへから
むとよろ川は思ひこそされ給まさらぬ人とまず
しものいふかひありぬべくややなかみるあ
さらさき心ちしてこのひなれる人とては代
山里のふかき女ならずかなふとぞおもるゞしんまるつ
うしろひあはすべき人のなさましよ故姫ぞゑを

おもひいでさらへ給ちぬれなりなし。おほせありしかば
これ人も心も其人給はりしやと、いとゞかなし
う。文のつらくなりぬりんなるげさらも、はらくと涙
くるしう見ゆ。おとゞ君を見て、まひて例の
あめやゝ夕つくさおりしより、やうてちりしは涙
とれうしいざさせあて、いとなやましきかどまで
なん。えさらしさせぬと人して申しいだし給へる
ときくは、いうじうつらくて、涙のおちぬべきを人
めはつゝめば、たへてまぎらはしてなやませ給ま
ふれりは、恋しく侍るどをちくまゐらせなくす
なぐれつらきても、そのうちまいさらせ給はじ

やはらくへづてありけれど、えこそあらんかひなるさ心ち
もあらぬときこえしなて、いとゞものなげかしけれど、なにか
はと一夜袖の気色うしへてげにやいとみぐるしう
侍めりとて、もやのうちうちおろしてよね侍の
ざうしきなりを、女君すくとは心ちもいとくるしけ
れど、人のかうしふまうさて、そちえんなるらむも、又い
かにとてましけれは袖うちすらし、ねざらいぞ
くらいめしのへり、いとかのうち時でものがたりに
おもひの、故君ちやうそめ給へるもしろへきのお
もひ出らるを、ゆしうもてなして、きこえ
もち恋ねへで、とえも袖もいとかはせざあらひつゝぞ

そのし給ふよるふかくおくまり給へる家もいとつらくてすの
こゝより木丁をすこしやりていれて例のなれくし
げまちかづきより給ふかどもかくればわりなしと
おぼして かねの君といふ人をちかうめしよせて む
ねなんいみじきことざへてとの給ふをきく給てむ
ねをさへいとくるしう侍るものをとてうちな
げきておはするを給やどをぞすぐすぞしさやかなるぬ
いかるれがたくしもつ中まちるやましうはおぼさるゝ
む人まどひ侍しかばしげしてそんちをおしかるれさ
て又よろしきをおりありぬべしてそとてへ侍しかばま
さわらくしくまでなるゝ世給なすめいとしとの給

いとなうしうてむ中納言はゝ君もなるくるしく侍る
むかしの大人もみそはものし給しかばちかづく給まで
人のもちわざとふ人をいひ侍めるとぞの給ふげに
これもちとせのおるらぬよりとみまいとてくる給
ぐるしう哀るればこれめしよせとうつ人のこゝろんを
つまれずこゝいろおもちちれてとかくえらりと
どもれむかしよりおもてゆうちまたなどおはれえ
こひとりはいかゝえさせるぐら人はえかうてまもさうく
まじはるいまよくめやすくぞいひなし給ひげに
ありがたきれてうでへはもときてねくらるゝは
ぶりまつげてを故大君れれるやまずはなちれぬ

へ侍りけるかしかどうき世中を思ひしられて
やまぬべきさんごうひとのこるらひ侍しをさうらうべしとは
御侍らんうとなど押からさろうたゆらば思ひとめ侍り
しひとりしはかれかりのひじりもんしだすがまゐらが
ひやしはらんなぐさめむらかまこちまもうしこまを
もりつづらひてひとのあらき海とらんはつ都でま
きうしるすまやあらむなどおもひよりおりくく侍
道どさうしはからざ海にはるびくべうも侍らざら
んらりよろ川は思ひすへかびて心のひくかきのつよ
からめわざるらられば、すきが海しなやうよおほ
るらんとをづしけ道どあるまじきこころ乃

うけても侍らべこうめぐまのしからめうぐらからうり
のうとすて時ぐおもふことを家しさせうけ給
るどしてべぶそてるくの侍りよけんをされらはとうあ
いづべくは世の人まくぬころの徒ハ君か人にもど
うるはのじく侍るを程うしろやさしくとおぼ侍した
道るどうらみくるるさきてし給ひき給める
くもひ家しだらくおやしと人もえおもひめべ
ろきまでハきこて侍らべくや年比こゝろすくなるま
つけつゝみしけるすがを此侍しかべしそさまつと
たうふのりしびとまて今ハこれよりあだきんへたれ
ぶろうしきこゆ道との侍らべばややうなすつおりも

まくもらぬ袖をいとくしぼる事よおぼしやき
ての給ふすがや。これは山里いでゝちいろうぎり
からうしてめしつれさせ給ふべきぞ。それもげにはたらん
どしかるゝおりてこうりと。まゐるかまやハおもひ給
ふどの給ておる殊いとおれうらめしげなれどき
くひとおもれば。おもふまゝにまうでゝあつけ給りん。
あのふさとをすゞめいづくしたれば。やうくくらうなるう
ねぶろま。めしつれこゑだちまぎれなくて山のは
まづしくてなすまのおやめもえゝぬまうといとしぬや
かすうおきまして。ようかの給へるも。ゆつらうしとのを
よろまはおばさうらぎるうるまおうるどいとゝあび

やうやうちらずして出給へるびて給ふ。かくと申し乃
里をもとめまはしきを。これ山里のかくれまゐ
ざる寺などはなくとぞ。むかしおぼゆる人がらこそ
つくり。おそろしげもなきとめてなごるひ給ふんとお
むかしまへなりけるとの給へば。あはれなる皆は
がひま。又うしろそみてゝし河ちかきうちとする
人がらこそおもひやまいておしうはれこがね
かともむろゑしをこゝろなるどうしろめたうぞ給
ふやとの給へば。そらよそのうくことをたえしもいつで
かうろまかゝおもふべきわざなりんちうさせ了花
みせうかたくことを給ろうさやうなるしんなんぐ

此の人をかなかなどこそ御うらみまゐらすまじけれ
こなたさまよりは御なげき給ふしこれのいと心ぐるしげなる
御もいとおしうわづらひしうてい御ゆくへすべ
てまゐらせて人々はみつめてよいとおやすくひとつ
まづきみをそそのかで給へとの給けれどもひのみ
うしろめたくこれをいとゞうれしくあきれはてて何
ごとものみにまかせてまゐらせ給はんとおもふ
きんだちのいとゞ御さくらひをなにとて御しう
てかく御心をやりてなぐさめにあらむとおもへばこれ
ちかき人のおもふことのあはれなるくてさらぬにても
またありし給へらずしていせのあらむとしもう

ざりし人のこれなればとおぼさるゝところありけるにや
すかはやそれさしてなりとのくはやすすめけれどもまゐる
うちつけにもまたしもなからはむつびおもひけんとも給
しばしのほどはこれらしくそおやしきまでむ
かの人のなにおもひまゐらせらしうばかりおほく
あり給しがさるべきことどもかおほかりの給めりへ御
ふるさとすをあさましうありてたちなれなむとなん
みな人ごともいひ給しどいとゞ心をつくしつ人
わびていかならむとの給あなたのゆめがたりうしなは
できくさ給へきゆへあればこそはさやうならむむつび
まことにゆるさるどうしてもくもかくめ給を

ぎやんとの給へば。いふやうやそのゆへをいひたまひけん
こうしんも志りつ杯待しば。ものかなしきありさま
どもまで世に おちぶれさばらへんとすらむと
よのとうしろめたがるにおぼしつらしくぞを。なし。
ただひとりうきおもひめで思ひしれ給ひたまへる
あいなきこととさきこえうちそへて。人をそへてつかはさ
んかそ。うちくわしかるべけれどの給ふ気色を
見ま。家の悪びて抱ぬどの給ひけん人の志のお
ぐさつきをみてらなかなるべしとらしきめぐふら
この給ふゆりまえてとまらで。かならずそれ
なしうハおひそてさせおてよといふうしから給へ

どさかまでかゝりけるぞえこ海かなきなんさては
思ふぞ〇むとおぼそんあるぞそのいふとはあ
え給べけれど。くるしうハしをえましぞや。まさお
まりいくばれ心をとらをしぬべきでとまるんとの
おへば。世をうくなりけるをむのおりかしづ〇まハずて
ろのかずらすゝめぬべきを。いとさまでハ思ひてまへ
らべきよハおもひざるれど。いとくたびさめんか
うるさとらとも思らひ給ふ。ひとかすのねびでぞ
らまは。なきてくは山里のかんざんにもおもひ給
らざらんち残たしかの給ふせよとうちつけに
をあきゝて給ふ。いさやいましへの流ゆかしもなかりし

ことばかりにてをもしきこゆるものハいとく
ちがひけれど。盛んなる心のふくそかもとめ給ふがいとお
しさのこそくもとて。いふへき所に年ごろ
まかせ母なる人のいとられつきこえけるおもひて
あるがちにさふるあらし給へしたちくもえいら
へで給ふはものしからしなるかのあらしかべ
まや。君すまにてをさし給からハあづらしかずな
んえんし。これといふさ海にもてあさんとるげく
めりけれ。佛にあるしんハいとこよなきさえそ
いおめ。さまのでハいのでたぬるどきこえて給ふさらげ
なくてかうつちきえて給をいひでいひされハ

けふをかぎれとおもひ給へ家とえるつゝけれどさ
まかにあいれあらあつまりしにとくハふくむくま
へ給ものゝかゝ世うはりしさあるさ海すハえあて
あし給ふぬをえあらぬへるはこそてとおもふ心
ときめにも夜もいつ文もと。うらすれ人めふ
とらいつくえしあてうちたゆめていふ給
ぬ迄バ。おとこ君てとりとハ西てありど。給いくう
らめりうくちおしきにおもづめんうさともあき心
世しそ。海のこゞゆすも人もろくれバ。よろげは也
ひみず御迄ど。ひくふろにあさいゝあてらんして
うし。らく。君すど。いとうしてわびためもおひあろ

へだたれバねんじ過してつゐにかうもあるげなきがち
うき世のならくのことおもひてハいかですべからんく
はしらをあべいろがいうましてかハおほかた乃世
のまどひにあるまじきけしきまでさもすきまじかれ
ある物わざとバさべからんなどおもふたらせんし
さうさうなしねバまやがめめ人のさめもこて
ろやもそるまじきてと線さうちなくおぼしあらせ
まうちとのなずまへる人ともいふでかハ海しとをと
ハえるべき、さてかれきこえるれど、さよしもま
かうハおしはかるをひとかれいかもおもはずハう
ほさくこそゆるべかれなれどなほそろるくだまへ

さうさうもたらず、宮腹のむやと久しうこそおはし時は
いとゞむつましとをくあるかんからしてすゞろはんかり
けれバなすか有はよは乃かどよおりしさりつくぐ
まく風のこゝちしてひてんずかうあつまりしきたなる
なれなるめこやどもうって人げをみてぞうろま
まづかまくらしあるしさるすずかさうなきよ弁れ
あまりいそうれバはうじくちにおもむびのま
丁寧しむてまいらせう、いかうしこたれどものして たれ
そろしけるに候ハヾつてまゐしくなんとおほするハせ
こそ、いかなるたのめ給はんとせめやうよおもてしらぬる
人もなうさく物語もきこえんとてあんなるべくも

つきなし月かれとて涙をひとめつけておハすな
に老人ハいとゞさらにそこきもあへず人のうへにて
あいなく袖をおほひかくれめりし比のまゝしぞうらしく花
もひかへいづまいつと待しぬ中まをと秋の風ハみ
にしらそつらうおぼし侍て。げようれなけ世の中
あらしを。志らるゝ世中にて流行さ波と。うかのまよう
け給もさ波ぐよなすどきこゆれバ。どあるしとも。か
く給ての御ものがたりふ遣バなる様なるやうをおぼさど。おち
きなく御心志るらんとうけ。おやまちのやう
に驚なるしくれ。この比の流有様ハたゞかうそれなら
よれつね遣ざれどうしなめるけよいらしなさて

のハざめりかなひてもくるしき京よのかゞりめ
ぐありのことそうれものづれめすなるぐなるをくれ
ゆきぎづ川かどハ花いといふぐらひなりなれとても
まちなき給ぬ。おぼらめして御のなれ流き日の給
かとけのことなすど乃給ふ。さてことにかく時ぐまの
もろまつらすてもうひるきことれやとそうくれ御心
ふかうとやくるなどこれちん殿とかちてられ山
寺のさるかうまづうたてんとあんおりふど。おなな
にうハそくうじめてんとみすまひてだうかいくれ
らうども。ぞうなうるでおなべきてしなつさいぞ
の給ひなど世きせ給と。いとたうときこえ

あらそ、むかしの人乃ゆくへあるにまかせあつくらね
たん所をひきこがうんもあるけるさやうなれど
それはことわざしも、くらくのくるまはすくみぬべく
おぼしけんど、まことの人々とおぼしやりてえ
さはなさて路ハざりしまや、此海ハ岳部の白家の中乃
くさそいよりみへたればこれ家の白はつらやうともい
ひつべくありまうち、さ迷ばこてなずらう寺にあるさん
まいびんるなるべし、ゆゑまうきてさもえせで、わ
のさ海もあまりよ川づらちかく、けとうのもあれバ
る浅きん所どうしるひてでとざ海よりもつくり
くんのんまてあんとの路へバ、おきつ海かうざんまゝ

いともしこうこうとさはこゝろなるら、菩提のれを
かるしこそかぶねとつゝこそおまるさめうしくびよ
かけて侍し人を、佛のはたる御んまてかれらどれ
のおころとすてく、つおよひじ王の道にもいう侍
てはくろ、これあん般どはらんぞろまつけてはこ
ころうごこれおりしまずらん、ひとへまさいくあさ
はるすならまさ後世のはてめともなるべきこ
とま侍らうらそざさはうまつるすべし、それこ
のらせれえしひよて侍らん日をうけ路て、
地のゆくへありさんたくこ二三人をありりてご海
さあるこくとも八、仏のはなしへのまくよつりまう

らを得んとすも。あかくれたるひさごめてみ
さうれ人ぞをめして。これかどのしとぞを。あざり
のいゑんまくまもへさよしるどおかせ給まぞら
なくられぬれば。その程ハとゞまりゐぬ。此あび
からしそハみめとおぼして。ちめぐりつて父給
へぞ。かとげもえあらみ寺まうらしてかれバ。おま
君のまこるるひのぐれとおり。いとをとるるげよすまゐ
よろと。家まいりよしてまぐすんとそねふ。これ
あんでんハへてよつ屋さやうあ。つくりいぞんが
どハ。かれらうま拙し給へ。京の君まとらやくさるべ
き拙るどあつバ。これさうの人めしてさうべうらんや

まゐのしゐ人ならど。まめやかあるるすぢをとらひ
給ふかうそてハらぞうりはげすぶたらん人とあるま
うど兄のれ給へをさまもあらねどよかもちくふせ
てむかし拙ぐるるどをさ世給。故権大納言の君れ
これありて後をさく人あるさまふやもくていとろさ
やうま字也。今いとなる給し後どまめづらしうお
りしますんれありさ後とぶらし弘拙まおもひ
字しさ世給めりしれえしれるどれ。たまひなへいで
らうしまうくもろけ侍しぬ世のあきまうくてこそ
まゐりなん。かれれ世まむつましうつくうまうりを
そうしあるしの。そのづくら侍るうとうれしくもる

しくもわすれかねたまふこゝろざし今のおど
ろかくさ海ぐれるをみのへずして志給へと
給ふあん。いとゞうしろうたくたん給ふ家より
き時ごいまのりでみなれ。おぼつかなく候えむらむ
てめかいごうよなかうおもひへぞそのうる色もそのゝ
の給いするおらく給れど。ゆかし給ふでなん。何
ならぶ佛よかりなよいみなでまうちまほしきん人を
あくなるまで給ふあるにせさこゆ。故姫君のはてどぐも。
をとつなもせば。さし此の法ありさ海あるどうらて
あるれおりなすまとの給しうれりみだれいろえみ
て色。ならあくよき給りうきとくちるどとはき

なからぞうらわるゝきたれどなゝ家すこあかし
りことずくなう御物かうしたかうおかゝる人の法らで
あつべえられとのゝいとで又てえ給。家の法仲さま
今すゝしいまめし此物らふゆりはぐらん人乃
ゝあまはぞしゝあくもでありし給つ衛くてそもれ
し給めるを。我まゝいとんかくあるさけくしと
いかしそでいぞ色してんとしそしひのへ進あるど
心のうちよおもひくらべ給。さて地のつねでまかれか
しまかわれるかといぞでのへり。京まこの此給らん
ゑ見志り給らば。人づてまうけ給うらしるすのす
おなくるを。故宮のまざら御山ずまゝも志のりず故

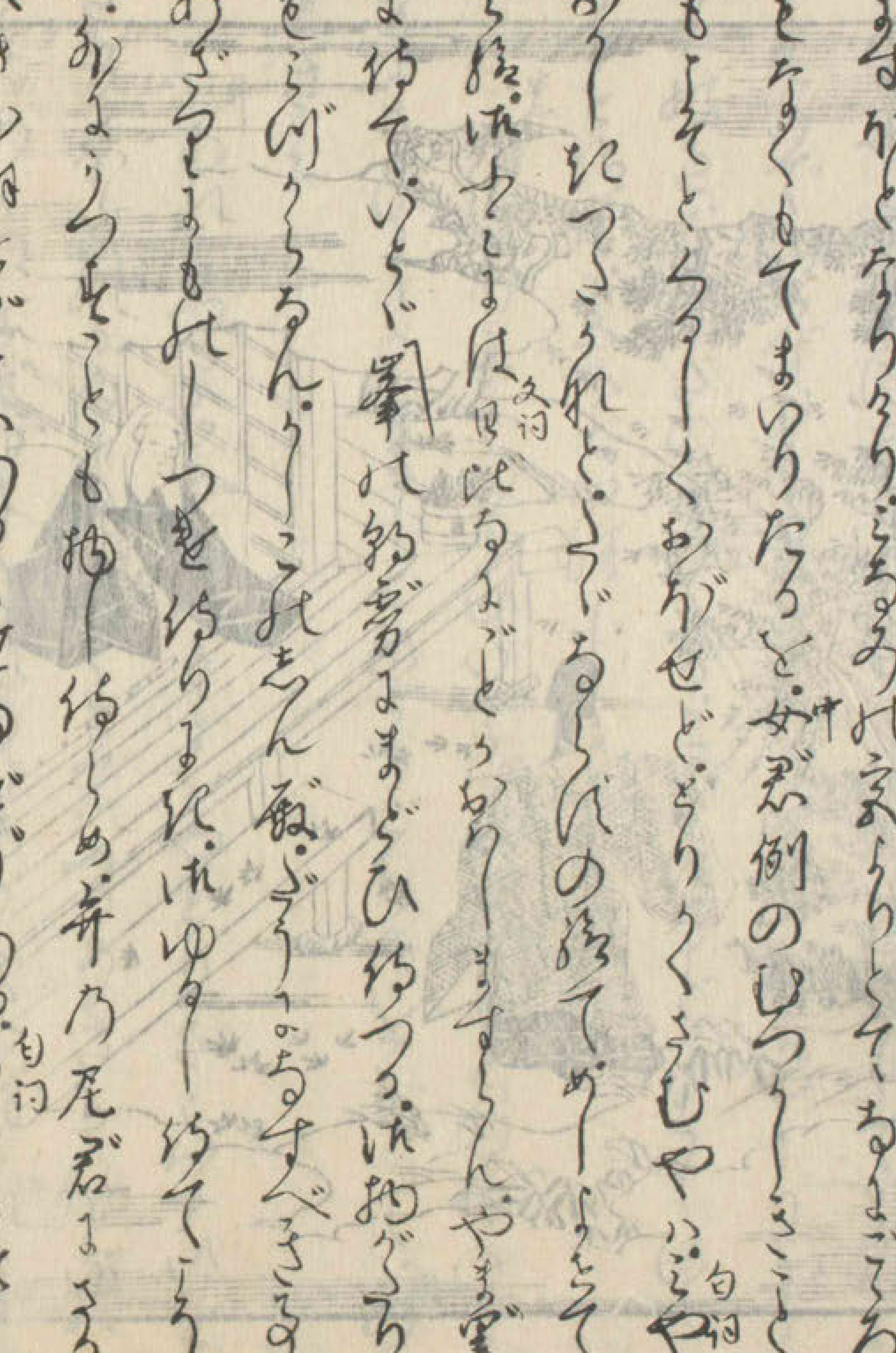
心のうちはせめてへだつるかぎりなかりけるに、中将の
君とそこはまことにひとつ上らうのみかなせうども見えし
うへ侍らざりつると、いと心のびて、えんなるさま将よ
御の給はせなど宮の人も侍らざりけるま、女御子
をたのみて侍るをたてやあやしとおぼさ
られめりつるからは、そのいたうくやつしつうもめし
きやうは松がしなりて、まさなきを忘れんじいる
ことを侍らざりけり、おいたくそれてとよおほし
ふるえやうておぼしきひとにけなきと給ひは（中将の君）
けるを、それしうるくおはひてえさらぬにならむは
く御かくえられくのをきみあるらてくづらくぼが。

ひとよせのかりて、それ君たのりうしも神しく給へり
はやうりよもかのめしやちりくるを、ぞくへしめし
つけて、さしまうく御せうそこあるべきこときこえあ
らずとの給はせたるからされば、びたなくてたんな
げきさ侍りつる、さてまくひるちなすりてくぶる
給ひうくつが、げにと、しはるとみもえきこえ給はざらむ
身がはの君のかりて、かれまなく、まくらひうち
なるとたのみかのきこえ給へしられ君のとしいみそうち
どうまありし給ひめうんうし、いとおかしげなるひので
給ひがかうかるしものとあるどもそ、中でうたかく文まゐらへり
きづけてなすんさるべからしとくわゆゑくわしう

さくあさらめおもてはらが海ととうてもあんしら
しみじやとおりふんのできぬむ羽しのはけがひよ
うけてもかれつらむ人にもしらぬ人までもしらず
あらまほしきこそちれあつとうかましくへかわさるを
されどもおよそかうなる人まてそいある仁わざしと
いるくとも武わさらはとも子おらはらむつみで
まかくなりんのひしとつらへ給へるどたいらの給ひ
どく母君は故小くさのはめいある弁をとるれは
あるらひよ給へきどうれうきハおくくよ給うて
らかしうも見給へるれざられさいつしろ京よう
たいおがもとよりやしうしはられ意なんいらで

されはそらおづまおいしむとの給ひなすらはらんを
よるど給しかどまづこれさしもへてはまを
ちらはず給ひら今さらばさやうれつみでまうらは
おほをとするどつらへ給らんとさふゆおけぬ
並びなくへてをおのれんとてよべきくれてもてまいり並
はきかれらるどやられ拙おさらにさくらせ給ふ
あま君おものふ法師がらあさし恋れげをどらもの
並りまとで布るどいふまのもとへめしてふぶん
おそききまぬるれどうはれうぶらひうゆさ
ぎりられば方れおどうへひてめやすくもあやうくても
むすこあるひそうおがらしれうへうるおまでゆとらを

したるは、諸の木どもをなくもちきたるもみ
ぢと、みなかた御あとをみしぬとふやうして、とかくま
ゐえのぞ給ず、いと気色ある深山木にやとらるゝ
つされたるまゝのかうかう、こだにあるどすてしひき
らき給て、家へしかばしくてまうせ給
尼どらのかとおもひいぞずばかこれもとの様にも
かまさびしうましくひとりごちなどして、お
まぎらし
おれをうちくちまれなりとやどらうるさとおもひ
さうかどれうるしさびくまでかるあさうれとゆへ
あくはあるめとぞ、いさゝられあるくはあるよいおぼされる



中 こやまもみぢ萱ノをてまつ進めへれバ、おもちこそおかしけれ 白
まなかどなりけり。こなたみれ家々ともてなすまゞこゝろ
をなすもてまいりたる。中 女君御前のむつましきこと
もよそとかしくおかせど、ゝりくさむや。白詞 いらや
おかしきつられと、ふでおもしろの給てめしよせて
ら給、なにしまはは 文詞 日比あまたどもおかしまするん、やま里
ま給そいらぐ筆れ御旁まゐらひ給つる。これ捨かぐり
をらびかかるん、ほうこ是君んぐ殿。ぶりつのちあすべきさる
あざらもまもれしつを給らすこれ。これゆるし給てこゝろ
いおよりつれことも。捨し給しめ。弁乃尾君よなる
べきおほをゝどいつるゝせなるどぞある。白詞 よりしも御進

うきあへはかくられ。まことあるとぞさきつちんとの
給も。ずりしハげまさや、なりつゝん。中 女君へとちちを
うれしさ思給まあるからまらくの給をうけし
とおぼしてうちあんじて。お給へかけさ海よる
びのつるもゆるしけんべくおもへし。白詞 進るすらい給へ、え
じやとておとなざ海まそむきさ給へり。けん命まへてか
ざしむきあやしけれど。文詞 山里のはありさまのうち
やましくも給われ。うしこハげまさやりまてころ
よくと見給へしを。とにかくまでうけがれ中そ
とめんよりハおかしくころまでうち給うと。いう
かきさはべきさ海まちさせ給ふどろちるらび

なんとこそ給・かうまくきこえしけれもあさまし御
ゆらびろあらうとみえ給ひちすゞ・けれ(句ノ)ゝところな
らひま・つでるらしとおぼすがやむらぬちうべ
し・られぐるう前栽(せんざい)の中は・おどれのもみぢ
てとみなをうし出てまつ○くがおうしうこゆうさ・
まるゐま出さし・うつき・露をつゆみきとたむ
むれを・たちあげはうちろびとさもじ・例のこと
なれど・夕風あちあられあちうし
(句)わぎのそでぬもれおもふらし給のずくさかきま
わくたまとの露たげくして(句)あつうしけれどけれ
どどもまおもとしぐるうき給て・琵琶をひきあ給

へう・うちたききでうれうきあくせといとけるれは
ひとさるしめへ・女(中)君まこころはいらのへうしと
ようてをのこんじもえしくて給ずすち・いたされ
本丁れつまあらうげうそくまらうかきてかのまま
さしゝぞおへ給・うとこ海かしくらうきげある
(中)秋ころのべれへしきもちのぞくきかのめく
風まつけてそうちられ・あがおひとりのとて須磨
給ふ・ぐさすまえゝしされば・おふぎとおゝさう
してあかずかつてうれうちのらうくそこしゝ
ら給きど・(句ム)ゝ給まえ人もえおもひくちうさざ
ちめどうぐひしときがたてむすでうてめしけれ

なあり。菊のまがきもうつろひそめげさとく
ろひそてきせのへうそ。中々とそなさまいろなるひ
ともとうろおもん。いとえ所あてうつろひなると
とらけなそておもをのて。花の中よひとへまとず
給て。なよぐしれ雨家た古にくるのこみとのこれ花めでうろ冬ぞかしい
よしへ天人わまびとのうけ有て。びとのみとんそうぬなされ
ごとさしあさくるらまたる世ハ抛うしやとぞ。ほこと
さしとなさ給を。けんくちおしとおぼして。羽いとそあさく
さあらめ。ひらしとつくえらんてしさへハ。なるぞてか
さしもとて。おぼつかなきてなど。とゆしげり
おぼいされば。白羽さらばひとりでハきうぐしなま

一七三

さしいへ志のまへりしとて。人めしてゆうのはれ秋分
とりよりをけとそて。ひらをさうてまろたきへど。中羽昔こ
そまかぶ八人抛し給しど。かるぐしさうてさそ
めぞてあらあし。抛とくて。つてまりげなそ見もかき
給ハねバ。白羽かでなれるすも。色ぶそ給へ所しうことろ
うられこのひたうあくもハおぼいとんとくべきおぞ
まもあられどうろさらなうぅねこともく事
しそなれまべでかハやいろかり。こそろうつくしれ
あんよなさしく。まり。それ中納言もくうじめり
しがられあまくる。かうもつてき給りで。こよなる事
は中なあれバなど。まいやかまうらみられてぞ。

中 うちゐげきてすゑしあらへぬふゆうびくちをれ
もりんあさでうはあくを給うさあくせあど法
ありそとおうしうろて雨ぞせのうとうそひ給ふ法
あのあてはおうしきさと女ぞられものうしゐ
まちうづきまゐうてあそひゐづらてかきらゐる
ごうれしまむすそつゝけ道じそれもてとりう
あれバ院ハおまへとぞあいくくへとをりやさ御
かゝ給はあらき御まなじらひ給べくもいのさぞらし
もしざりれは出まゐとまさくへりちの御わしげす
おぼしての給ハするそいとこゝろうけれあどれ
ごいひまのへバかき人でハいかなる御やとせのすれ

こどもさしへそてまうりなぎあうて三宮ほ一かを
まおりもして法施いみけるどとつけ給とられ殿
まれうちめしくおぼしておぼそうちゐり出給け
御まくまぞろは御のりつまへれば家ことくあげ
ゐうさ御してゐうしまいましつるぞとおもひ
ろりぬへどおゐさまやくろ給て法いめし給よく
ゐうゐすゐひめどハこの院とされまへで久しう
なう給うそ旅まこうあるじ昔の法施るどすと
しさて給てやがてひきつれまつりぬて出
給ぬれどもは殿づきさめ上達部殿上人あども
いとおぼくひきつき給へ給はいさきかひろうぬ

ところはおもふべくもあらねぞくしげきさびしかるらん
ものゝあはれをしりてぞもよほさるゝおりしけれ
そのことばどもいづれともなくうつりかはりて
きよげはおほかたなれどもおもふゆかりのべきもあまり
そのおもむきやといふもはかなし又さかりなるや
ごとなるげなきをかれさ海すそてうつりかはりへはまゝあり
さまへ海をそすくけしきやゝけるに世やうつりかはり
かるげくをあるべし。ゆかりづらうよりしてことゝも
まるらうじめつれ花やうたかれはるかひまふ海
じかべくもあらぞ。今さら身のおもしとぞ。いよ
のよみおもうなれども心やすくなりおもふんかな

しそめやそうらめるどいふと笑し給。なるなくて
どしも夢ぬ。むかしのつごもりがたよりいまわるゝ
ぬさ海はなすやこのを。文まぐさはらんじなりうぬ
るすをでいうちむとおぼしめしたまてぞすほう
るど。前へまてあかさをさせ給。又こゝもじめそへ
させ給いといふかづゝひのへが。花のころやよう宮
はとふつひあらくてこゝもせはなりぬれど二郎
のはんぶしすそをあろるしね。大かたこのせかもれ
くちうをもてなしこゝろし給はざりつるとこみ
おりぞいづこうもくこゝろしめしおどろかさて
はどもひどもこゝろし給くる。中納言の君のこ文の

おぼしさくらんまもそらずいふにおかしさんとなき
げなさて。こゝろぐるしくうしろめたくおぼさるゝを
こぞりにけるはらからひだりにそあれ。かすらもえ
まうで給はず。悲びてすれいみじうあるひともさせぬ
ころ。さは父二の御れはすぎ。さて此比によりて。
世中ひびきわたるものゝ哀ろ。よろ川のるすみど
乃れこゝろひとつぞうやうにおぼしいそげ給。
うしろとするさしをぞ。中こめでさげよみもしろ。
父れの志をさし給へはするども。かゝる折にてはなくて
どゝろざるべきぞうやうどもあるど。どうぐかう
こうまつるすぞとくぶらすなし。やがてそれ

かゞやきまさりそめ給べきさやうにおもほしければ。おとゞに
がさもかゞづらひし給ひければ。例の心と思されど。
そなたさまにはいんをいとで。これはとのこりをた
しうおぼしなげける二月のついたちごろよなるを
し地といふところに。権大納言になりて。右大将かけ
給。堀川右のおほい殿左すておかしけるが。ちひさなへ給
とゞろそなりよろこびに有ど。おりさ給て。此宮
またまいりすへり。ひとへくるしうおもへど。こなたさま
おりしはすむどるなりければ。やがてまいり給へり。侍
るどさふらひていとびんなすぶうさまとおぼしさ
給て。おぶやうそうあるぞしければさかはれるど有

ま、ひきつくろひて、おりて、ぶたうのはいし給ふ、御さ
まども、とりどりにめでたし。やがてこよひつかさの人よ
ろこび給、あるじの所まで、ふうじまり給ど、なやみ給
ふ人まありてぞ、おぼしたゆたひけるを、右のおほい
殿のきこえまつり給ふとて、六条院にてなんあ
りける。みこたち上達部、大饗にをとらず、
あまりさはがしきまでなんつどひ給ふ。この宮
もわたり給て、しづ心なければ、まだことはてぬにいそ
ぎかへり給へるを、おほい殿の御方には、いとあか
ずめざましうとの給ふ。おとるべくもあらぬ御ほど
なるを、たゞいまのおぼえのはなやかさにおぼし

おごりて、おしたちもてなしあへるなめりかし。
からうして、その暁に、をとこにてむまれ給へる
を、宮もいとかひありてうれしくおぼし
たり。大将どのもよろこびにそへてうれしくおぼす。
よべおはしましたりしかしこまりに、やがてこれ
のよろこびをうちそへて、たちながらまいり給へり。
かくこもりおはしませば、まいり給はぬ人なし。御う
ぶやしなひ、三日は例のたゞ宮の御わたくしご
とにて、又日の夜、大将殿より、とんじき五十具、碁
てのぜに、わうばんなどは世のつねのやうにて、こ
もちの御まへのついがさね三十、ちごの御ぞいつへがさね

すてばむつきなどぞいとくしかりけれはものびやか
にをかし給へれどこ侍りけれはいとわづらはしめかし
されば心ばへまぞえてけり。家のおまへにもまゐりぬ
のおしき十二してつきどもまで。かずく
まいるをのへり。女房のおまへにはつゞき四どもお
さ給はれるてひろげご三十。さ侍ぐゐくしける
ことどもありひとめなるとくあくいでとさらなる
しくまかず

七日の夜ハ、后（きさい）の宮（中宮大夫）よりれうぶやしなひあれど、
まいり給人〻いとおほかり。宮の大夫をはじめて、
殿上人上達部のこらずまゐりければ、うち（全上）にも
きこしめして、殿（白）のりしめておどろかるゝ給ふさま
いそぎうへの給はせて、れいのしるしそえてまつれ給へり。
九日もおかい（タ）殿よりつかうまつるを給へり。かしか
らぞおぼすおくちられど、殿（白）のおぼさんためあれ
ハ（タノ）ね子の君ぶちるでまゐりゐて、ずべていとおもふ
ことなけよめでたくれば、（中宮）ぢらも月ごろ物おも
りく心ちのちやすきまうけても、なほそうれた
がーワうりつるま、くおもぶしうつまめうしさ

いとゞをかしくおぼされば、すゝうしいるぐさみ、もやもさ給
ん。大殿（上）ばかくのことおとゝるびそて給ひれば、いとゞ我
うさぎ海ハけどとくやたまうん。又殿（白）のけんぶしも、え
まろうなうじとむかからちおしられど、又らじ絶
まりの心もみてどおぼすまハ、いとうれしうもあらか
らてそれ月廿日あまりのかわざぞ、藤つぼの宮（女三）
乃ほまざのいとあらて、まさの日たなん大殿（上）まい
宮給ひて、それ夜のこといはしのびうつさ海るり。あめ
のきつぐひごきて、いつうしくみてつうけりしづさま。
宮人のかしうてまつり給ず、たゞあめずこころづく
あくらゆう、さほれゆうしハありたまうわ、たゞいまうく

しをいそがせ給まじきことゝぞうしとそこら
にしげにおもひの給ふ人ぞありけれど。おぼしふち
ぬることもすくしうおもしまれけんすて。そこしか
されたりしたまさまでおそすじくはもてるさんと
おぼしなさつゝすめり。みかどのけれむもとめえ給へる
人ふかうしも今もおぼりけれど。うくさうのけ世有し
たゞ人のやうにむつこぢりいうぐを給へばさてひき。
もくなくやあいるん。右のおとゞをめづらしうつも
ならん人のはおぼしもくせなり。故院ぶそ。朱雀院の
まゐまるらせのて。いまいとやつし給しさいまそ
れらてみやとえそてまうつ給しが。御遣さゝまいそ

ひとものゆるされぬ御とひろひさりしやうゝの給ひ
つれども。宮ハげにとおぼしまづしうて。けいとく
もえしのびず。三日の夜も大殿つよりもじめて
られうるれんよせまゐらせ給へ。御人でけいし
まおぼしをさそのそ。恋のびやうるれどうれけれども
ずいぎん。車ぞひ。ざねらろども。まで。らくぬのくすす。
そのれどのことハ。つくこしごとれしやうきずそあり
なろ。くてのうちハこのびくはまいり給。心のうち
におはなりとハびれくらさいかしへぎ海のとおぼし
て。ひらもそけれどもはおさくかしなぐめくらしてくる
道ハんよりりしはいそきまいり給も。なをらいぬん

地まいと枕うくるしうて海でさせられてまゐ
らんことをぞおぼしめされける。母宮は女三ノいとゞう
れしさことよおぼしてお詞わりしまず寝所をさ
まてわらしなりあべくの給へども 甚詞 いとうらさじけ
なるらむとてはねんぞぶつみおわびさらうとつ
まてつくらを給ふもおもてまうつろひ給へなるお
まびんかしれ義ぞもちなどをやまでのちゆうは
らしくはるらしくあかし海わりきとりよくみ
ござさそへつて。こまのはあらくとなふりう海れこゝろ
つひと今上うらまもさむしめしておぼちくうちと
けうつろひ給ひんといふとおぼしまち。地みだど

とかゆれどゞかのやこれおなじこともまちてんおりしま
しまる。母宮女三はもとまれ今上ノつひおりまるにまりま
まだびはらとをのこなん御しませおんへりまな
紅朱雀院のそりわまでこれおほなみれてとまね
まゐこしそらを給しかべく世をそむきを給へ上で
おとゝろへなでたゞはごともをもとれおもよ。女三ノみそうせさせ
給ひとるどゝわ今上ノなしずこさこしめしつれれよう
いかくかゝらくやむでどるなされにつろづらうどう
くみまのぞわりもちくまでりしつきさはがれ給
おもぶつしさをいつなりまるあくむ並ノこゝろのうち
まいつとなうれしくも見えしびるおをもすれどもうち

なかめつゝ。宇治の寺つくるまでぞいかゞと語。家(白)
のかたざまにかよひまゐり語日(五十日)かぞへとりあつて。それ
もちおもひなぞらへまいれて。ご抱ひまりごるど
までらいれつゝ。世のつねなるべてまいおふずとは
かしころざしてちん。志つん。志ろる。こゝかれそ
どみちくぬきかくごもいとおほくめしさかう
をせのへば。われをとらじとさ海ぐれてどもを
志いほそめり。膳(差)かづらも。例(れい)の家(白)みおはしおさぬひ
ままおかしうち。心のおうしまやおもんゝ海くゝて
ともくさくやむごとなるげなるをしれさへそひま
さりと見え。今(中ム)いきりともむつらしすゞろが

とうぜんはおもひまゐらせ語よそらんと心やすくて
たいめしのまへり。(差)されどありしちぎられ氣色こ
まづ洞ぐらそて心(詞)ずもうらぬまじらひいとゞふひの闇
うなかる拙まてそや世をなのへらぶゆくるすのこちん
まさりまたうと。おいぶちなくぞうれへ語。いとある(中詞)
海しきれとられ。人もこそまのづらう母のかりみを
もらさて待れなどいのかまへど。らばかりめでたげ
なるすどもまもなぐさ海す。かまれぐてておぼし
語らんものをまよと。家まちすそして語よすろうまを
あしずふひ志られ語。(大)おかをまじかばとくちおしう
おもひ出ましかへど。それも我(わが)おりさ海のやうよ。

つゝやこちくかとうらむべうなうし。なかつことを
なするてよ世の人めしきこともあつまいくら
なうとおぼゆらまず。いとゞられうちさけゝてぐ
やゝなんと。ちひのへりしけんあそいちくなと
まとまくしうちいでゝれ給。わか君をせちまゆし
がりきこしめへだゝらしかれど。何かは色ぞそ
ぶかなもあらん。まりちるきさとひとりまつなてうら
みうりちかよは。いつそその人のけころよ分ゞ心
じとおぼして。ゑびかくはともかくもいふへつあし給
ぞ。めれどしていそさせ分まつり。けちなう
ことちれど。まくげなるむやは。ゆしきまでちるく

うつくしうてかやうなる御様しうちとこ給へ海ゝ
ほどなるは。うつまみなてこまほしうなくやまし
きも世の御心もしるれがくちらぬやまやあらん。
御まへいふかひなくなり給ひ。ひとのよれつゝ
の有さ海まで。かやうなるひとのともとゞめさせ給
へしましかばとのこおぼして。ひゞおもぶて忍げなる
れあくらは。いつしかるとは心のしぬしそはかります
べきすこし君の御心なめれど。めやすくねぢけく
まつびるをそいとおかしうれ。忍つわろびるほ
ゐらん人へと。ゐどめでられつきやうよらかづけく
むつび給べきまもおもじ御との海としたらく

おほのはなさかりまてゐるところハめやすくもの
給ひめとぶとしたる御べき。げんようとくおほさる給
ゆひどもさらんと給へとも春るれバ。近いよういハ拙施るど
こまやかにまたし給ふどもゝ。薄ぬれバこゝろやすく
我とぶまかくすましきと。くもしうおぼゆれハおほ
げく出給ぬ。おもひしけひとの此句ひや。おもひつれ
ハそういふやうに。鶯をこぶつうぬべくめりけるどハ
つらしがりきこえ人もおほり。あきたまふハ三条の
家みるさいるうるまなうりぬべしとさだめて四月
のつちゞころせちかんどういふるのおふくあさきさ
きまいるしまちぬ。おほとそのひ。藤つぼよ人

ゆるしを給て。藤の花のえんをさせ給ふ。これ
さしのされおぼそてはいしそらうおほやけわざ
まておぼしのえやれつくりなりまへあそび。
上達部殿上人の饗などゝゝのへさせつゝうま
つれり。左のおとゞ。桜襲の大綱。藤中納言左兵
衛督みなこうちハ三の宮ひらふにまゐるどゝうふ入
給ひうるまれ庭の藤のきれのもとに殿上人の座を
まうけさせてふんのひんがしまうくゝどもかれん
めして。これゆくめどもそうでう吹て。うへの此句
きびま。宮の此くるりはてゝどもかえるどいつ
きせのすへハ。おほくとえじめまちて。おもすへまゐりつ

つまつり給。故六条院の御手づからかきて入道宮
にたてまつり給しきんのふ二巻。五えふの枝につけたる
を。おとゞとりてそうし給。つぎ／＼さうの
御こと。びハ。わごんなど。朱雀院の物どもなりけり。
笛ハ柏木の衛門督の夢につたへしいにしへのかたみの
をまたなき物の音なりとめでさせ給ければ。このおりの
きよらより。又ハいつかハはへ／＼しきついでのあら
むとおぼして。とう出給へるなめり。大臣わごん
三宮琵琶など。とり／＼にたまふ。大将の御笛ハけふぞ世
になき音のかぎりハ吹たて給ひける。殿上人の中に
もさうがにつきなからぬかぎりハめし出て。いと

おもしろくあそぶ。宮の御かたより。ふずくまいり給
ぢんのおしき四。したんのたかつき。ふぢのむらご
のうちしきに。おりえだぬひたり。しろがねのやうき
るりの御さかづき。へいじハこんるりなり。兵衛督
御まかなひつかうまつり給ふ。御さか月まいり給ふ。
おとゞしきりてハびんなかるべし。宮たちの御
中にハ。さるべきもおはせねば。大将にゆづりきこえ
給ふを。はゞかり申給へど。御気色もいかゞあり
けん。御さかづきさゝげて。をしとの給へるこはづ
かひもてなしさへ。例のおほやけごとなれど。人に
にずみゆるも。けふハいとゞみなしさへそふにや

あらんかしこしめかりて。かゝりしさまへ
おはしまさ。いとゞかなしひなし。ふかうけれみえうちたえ居
ちかどの御ありさまのふかうよ。ものすみちかるをも。これは
ましてはむこすそ。まてちやされてまいり給へ
ば。はおぼし出すかるもじめづらしうさまかぎりなければ
かぎりあらん御まへりつゞく給ひど。心くるしうさまして
なんくしける。おぼち（御抱大納言之）大納言は我もかく給のもと
ひとむしが。わくこのわざやとおもひめ給へる。それ
（むこ）やのはちく（おつぎ）女ははさぞ。いかしくいろうけるてしか
へりく給ど。まいりあてのちをちるをおもひえるれぬ
（きこ）御ゝろこゝろしかりしるかしなでもてまで（かた）もと

まゝんのこゝろつきそりければ。はらうしわこのみかむ
くしこさもらしや。けれど。（今上ノ）こゝろしめしまゐらせん
むかしはきこえれバ。（御梅ノ）げにさることやありしとおもひて。人がらい
けはらぎりことあれど。なすげ時のみかどのかく
おどろくまきまで。ひとりつゞきし給べきさま
にあらじ。この人のうちよおはしまさいかなる
さ給ひて人乃うちをけふりいひて。たゞへハ。え（妻）
んやるもやと。まてさばかりあるすはなど。からじう
えしもつぶやきやはけれど。さすがにゆるしたれバ
まいりてそれうちそぞろぶちの給へる。ちかく
さして舞ぞまなる。ぶんぶひのまとなかりつゞく

ほどのなしさハ。きのくちびるがほころびけれバ
地 御乃いふまあやしげよふりめいふりけんとおもひ
やまバ。おるがちまゐるもさびねかもがみのまち
まよふりとて。ほくちつきどもいひともありゐて
ぶあれど。なかしさりとてひらけわかつぞきひき
詞 きうらし。これハたねの君乃おりて。ほくぞしおり
てまゐりねへりなるとる
詞 まんべらさのうぐいすおろくちびる花をよがぬ
えだま袖をけてぐりう。地 うけでりうるぞみくるや
合 よろけせとへりてまほちん花あれバ名ふとも
わるねきとこそられ。まるさゐれとる

中納言 君がしめあれ家ぐさしハむしさささみれ雲ゐり
をとらぬなるれ名しきり
紅梅 まれつるの色ともうしず雲のまでしち乃
ぐりなる萩あるさいれ。これやこれいしぶろ。紅梅 大納言れ
字まなんとこそうゆれ。なさへハひがことまやあり
なん。なやうまことなりおもしさふしをすくのこぞ
わかりし

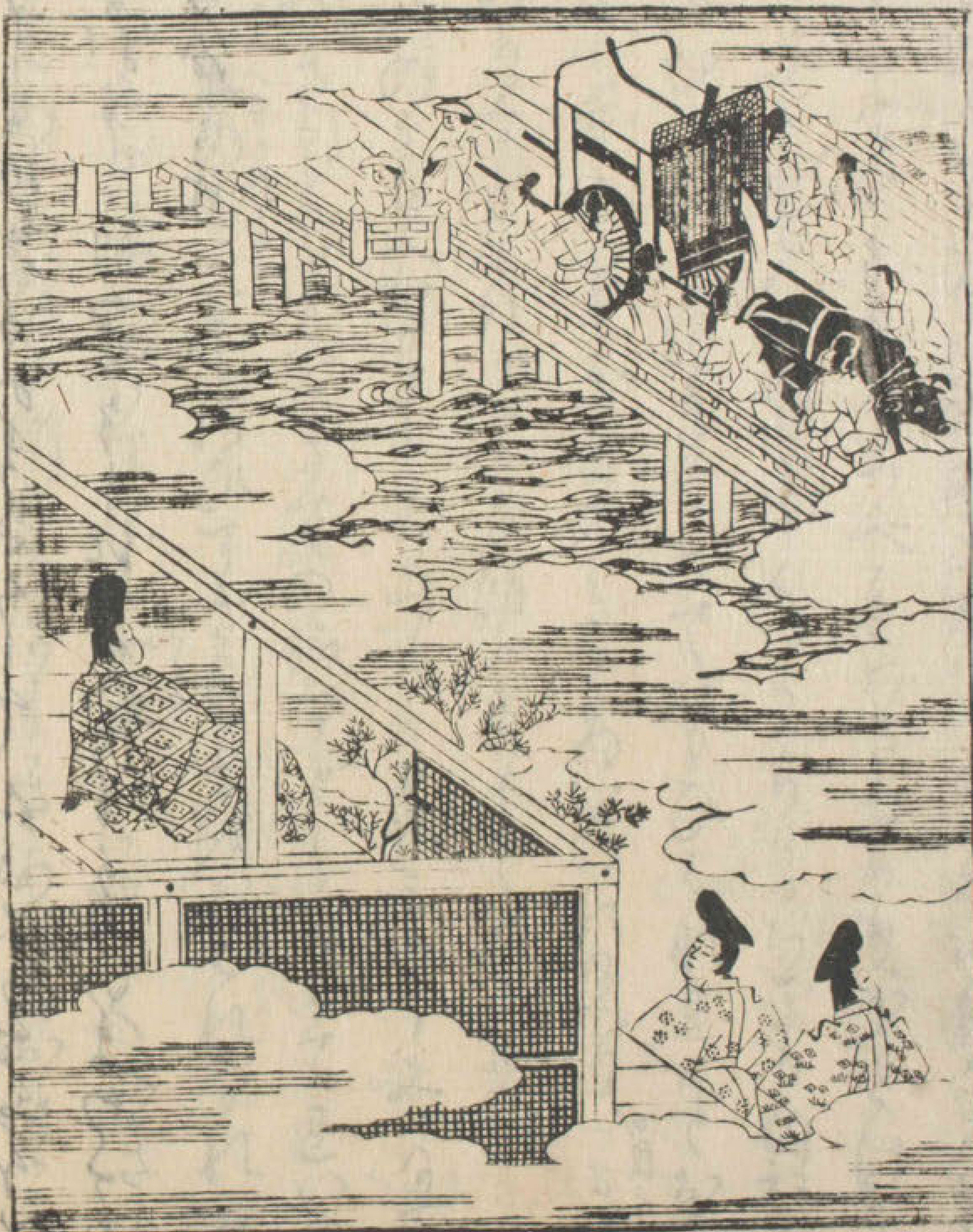
花かうあるじは御そひとおぼしめし・大殿の君
ハ・おなじうとうぐうへ御こゝろざしふかくめでゝ
し・桜寮も菅原の猶くらしは心のあるされば
やまもとにしくゐてうちあはせのつかひ・左の
御いそぎの八七郎・かゝるはまでのかのひ御くだし
くしかりければ・御ぞ猶うか・おとゞにいて・ふかうし
猶おもむきちかくなりてるん御くらを猶ゝかのこゝろど
もんぶちめ・みとうちもは・うへかりの御たより・御上人が
くそれ人でもは・家のかたるさもりしれぐにねがひゝそふ
よそかん・家までさせまり猶ゝかぬしれいてしん
もぞめり・うへの女房さなかつ御にもとりつくりまへと

猶々・ひきしのは車までひきしあまさいつはけ三
びらつけの二ゆゑ六づくり六・あまり乃びらつけ女お
ゐ二・女房三十人・ゆりは志もづゝへ入づくちうち
ま・おやしきへのいぶし車十二・ぐ一町の人でのせゝ
るんありゝ御はとくりの上達部殿上人・六位ゐせ
の御つかさゆるまでもつくさせのへりけり・がく
く心やすくうちとけて見まほし猶も・いとおかし
げまおはそ・さぶやうまあてまても、やうまて、つて
いとこゆかとこゝろあるくおりすれば・すくせの程お
おしいざりそりと・これとどりとて御物かゞ
すゞさうしる・のもすもれバこうれ・あめ・あそくは

ざ海くおりるく池のこゑしくおがゆれべきの世
まではたつぐさあるつべきかざるありかしらける
あらそふまゐへのやしくつらりろちかりの数を
何のむらひとはさしめておりひとれ進めておる
ひつて寺のつそぎまのところとつれのへりくされ（閒こ）
よりるどきはかしきさ浄じるして昔よ日のかど
よ例のうちへおもしろうくちを給ふぞうみゆるて
すべきことどもをとささての給あるどしてさて逢ひの
（きはくまへ弁内名と云へ）らち末のりとこ給ひすぐんがる低あられあれ
そちらくざ彼はおはすりて女車（うきみ）れてよくあさはれ
まぬはあしめひと例あしましきあづまおとこの

うしは地おくのあまくらして心まばへつずおかしく
さしもしげあるそしるそでくうしもりいまわり
しかるゆ

の中びくろ抱りけるとみ給ひて。殿(妻)はまづのり給ひて後
前どもあるどいはまづたちさわぎける程よ。此車を
これ家をさして来るなりけりとこゝゆ。此随身(ずいじん)どもを
ゞやゞくといふをせ(妻ノ)め給ひて なを(詞)よくべうとさり世給
へば。おもうちゆがさしけるもの。ひとゝちのどんじ殿乃
姫君のぐしつきぬ清水寺にまうでゝくゝへりのへる(なりけり)なり。
くじめるこゝまゐらんやどり給へりしと申す。(妻ノ心)おい
やごとしの人なりけりとおぼしめして。人どもをばつどう
まうくし給て。(妻ノ従人詞)ちや此車いれよごてまうくひと
やどり給へど。此おもてはなんといひさせ給。(妻ノ)此とこを
の人もこゝろかりぞめすゞるてさとくしうる



ぬすびとぞと見れども。あさましくひやうしぬけ
づらしげにさへこそおぼしまゐらせひきさけなど
しつゝ。こまりつゝぞなる。車はいれてからうぞ
しのつまぞよすゞ。それまんなかはさしあしくは
てすぐれたるけしき。おかしこめける中の二まつり。
毎年ゝなぞたのさうじにわたすめりのぞき給ひ
ぞれあれども。めづらしくさてあるとしるめでさる
うぞりぬらんてぞおぼしけり。さやうのもおかしで給ま
君はとかくとしてうくやんごとなげなる人のお
ぼすらむされぞあるにかくすることなるべし。君は車
ぞそれとて給へ衣より。ゆめそれひとしまする

ありしの給ふてまかりしめさせ給てけれども。
こおさ心えてなやおもらせあまりへまゐりとてまれ
しきへどことくまゐらんといふ世ゝ。かゝさ
人のおほ。まいおゆでずぶれ打なくめられ前ぞまれ
さゆらむこのおりにあれてめやすし文おひとなび
給人いまひとりおりてたやうといふよ。あやし
くあるはいろいろしそすれといふこちおりのかまれ
どいとはてやうは守りの候の比ごとにうるさいはかき
ざさもおろしこめてのことそは侍あれぞてはま
いづくのあくはるべきぞうと心をやりていふひはま
しげなおりゝとうれがまづらしらきやうだいか

うやうは。おてなる程ハいとよう思ひてこそれぬべし
あふぎとつとさしくしつれば。ほはらしぬ程にこそあ
もとあくて。ひ、うちつゞきつゝ見給。車ハたゝく。
おもく雨ハくもりふるとも人々ハやまぢうちおかり
なしつゝも。いとくるしげなりやしみてひさしく
たりてねぶりいつくろきうちくさまおでしつゝにた
はしさかそあるがりあへいろみこうちさるさてり。
四尺の屏風と。これきうじてそへてさてたゞが。か
みからゆるあふつれがのこうへくもあらず。こゝある
とばうしろみさげになひておもうさぶ御よしさそ
ず。そひなしぬるか。さもここちぐるしげにおかしまし

つるくれいづ。河の舟わたりもまことをまにかハいとおる
ろしうこそおりつれ。この二月にハ氷のすくなくて
くだりつれなりけり。いでやありさまハあづまぢと
おなへば。いづこも心おそろしくむかのぶかうして
くるしともおもひさればいひぬくろくに。思うれそとなせ
でひ進みしふり。ひあるとさしいでくろがまろら
うおもしげなるかども。ひさち給ふでいみべくもみ
え。おもしとはおてなる。やうくうしいくささまで
うち。すくみのへど。人のけしきひきいでとそておもとう
ごうでら給は。ワウさ人あるかうぢしや。いくらぶこさ
うれしこそすれ。おまえ君のかさ給はやあらんと

いふをいはひとりの女、けふはなるめでたき物のや、
京へ入るはいとそこやびかはいぬめかしけれど、
天下はいらじさるすとおぼしけど、あづま
そくはたきすのくふえあり世出のいざりきら
し。これ尼君のそまぬいくいそこすはおはすれ
ど、なうぞくのあしまゆしう、よび色あるをさとい
ぜいとこつかしまぞあはやるど、かおぬひろ。おな
られすのこよりいらいこそ、なゆるど、まいり世給
へとて、おしさどもしとりつゞきてそうしいふぞ
されどり、この世なましてかれけ給えり。これなどれ
こせどのどうかみ、はかうしてくりるどやうの

物はや、おぼろくとくふも、さてさらぬふらまいらるは
らいらくてあずさおすへど、又ゆかしくなりつらむを
さらよりくら給ふ。これよりまさるつきいみ人々を
きさいの宮をもはじめてごうしこまてうらちよ
これも心あそてなきうも、そらあくまでえなしかた
へそれど、おぼろけなうでは、めらもんをとくまうら
す。おまり人はもどう御くまでもれし給ふはん
たまふで、いまはおのまだらりすぐれてえゆかっと色
なきさん人なれど、うくふちさうぞくおなずらい
ゆかしさも、いとおやしき心なり。御まえはこれ殿
のはうくみもはをうそこにてしいふしさらひかれど

菫ノ心ちなやましとて。今の程どうちやまかせなりへ
なりとけともれんごころさしひていひかくされど
弁心 うきみ これ君をたづねまほしげなおぼしの給ひしかば。
うかゞひつかでは。またいとひかれんとおぼしまよひて。
日ごろし給ふやとおもてらくのぞみ給ふらんとは
おもはず。御のこゝろのあさげなれどもせまいれる。まこと
ごやるまやと。こゝろゆるもいれさるぞ。あげまゐれども
まゐらせたどことゞもそこなのひなさくさてうち
けさうじて うきみ之 あらうとのかくはさくらう。弁かるみ之 かれあつかさう
ぞくげないとかげらかまて。こゝめなる給よしくは
くちこのけなぞある。弁羽 そのふおりしつまるんとうち

あこかしさせしとるどかくふは日をけていとふなれ 一本云
ば此老人いとおやしう うきみノ くるしげなのこと給も給なれ
ど。こさのふかこのいひ河のひかりまとぞまかりて。げ うきみ そ
むごまはれんゆるあらひてるどいひへておこさば。い
まぞおはさなかゝる。弁 けま君をともちらひて。そなたそ
こゝろめ 菫心 されいありいとさくこゝゆ。またくまいと
よしおろまえのわかんざしれかゝられ 大ノ方 くをこ
かりしくつくぐとしもみおはざかりしけかぬれ
うきみ どうされところはつかねてこでそれとおもひ出らるゝま。
御の波おちぬ。弁 おま君れいへうちもつこ思けりひ
なかれるれど。家のけかくるはいとようはするを

きこゆ。哀なりける人かれ。かくてこそあれど。いまにて
まづねもえしでこしけるよ。これよりむらおもし
うらんこさわれ志るらんゆりまでごは。かどうらなよ
ひこえてしさしん人をこそハなるかまえおもふまじ
こんちするは。ましてこれハ志つしれさてまつしざら
されど。海ことは故家の族子ましてそハありなれど
ゑるし給てハうなざりるまうあまれぬうれしくおぼし
給さで今もさひよりて世中まおうしたるあれなとく。
いひなぐさめまゐらし。ありつらいまでさらでて。かんざ
し汰なざりとつくへてこおなんみなどいたる様いと
いぶきうりえん。これいこと人なれどなぐさめ蕨あら

ぬべきこさ海なりとおぼゆるハ此人まちならおかし
なるまやおもしん。尼君ハ抱ざうりすてしまそとくいり
ぬ。人のとがめつるかほりとらくてのぞき給なまめ
かしきうるえてうれど。うちそけるをもうしてうば
あらぬうぬべし。ほもくれまてゆけバ。君もやそう
出て。流ぞなどさ給てぞれいめし出つきうしだ
ちまおま君めし出おすておりさ海なるどちへ給おり
なまうれしくまうでこさあひるとうるまぞうれ
置しきつどのかへハ。志おほをずゆし後ハさる
べきつのでゆしハとまちゆしま。でぞハすぞそてハ
二月まなすん。を川をまうでのふりまゐいめんし

て給ひ。それより君はおぼしめしつゞき給ふは、かの
めのと給ひしが、いとゞいかにかくかゝりしけなき
ほどをそへまゐらせ給ひけるを、なん給ひしかど、そのこ
ろみひは、のどやかにもおりしまさずとうけ給ひし
おりびんなくおもひかへつゝてなんかくなども
きこえさせ給はざりしを、又これ程まもまゐらで
て、かくまへるありけり、久しけれ中やどり
ましかりむつび給ふも、まで見えしたけつひとつ
ねんごろに、ゆへにあらん給ふめり。それ母君は、かのこ
とありて、このふびんひとり抱し給ぬればかくおそ
しませしもあまたは抱し給ひんとこそゆ。お中び

すゝ人どもは、思ひやられ侍るおりさもえしさ
て、ぐちぐちめられど、いでおもん。げをどもはゝかれ
おもしろし。さて、いでずべきさびさり抱し給らん
そて中ころやすなれかく驚りかくてなん
まいりたまひあひたまひとつゝえ給へりしをの給へバかち
つけよいゝのかどなるはちゝさりまゐらせとうちわ
ひて、さらばまゐらへ給らんとていつは
さばかりあるて思もえてしまかおそやとえげ
さか同じくて、かかぞふかめさゝてはずすさのやう
まの給ぞ、いちそかゝりきてしうり

一九七號

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]